

エゾマツ

30周年記念号



2016 冬季号 115

北海道ボランティア・レンジャー協議会

♪ 表紙 ♪

(絵と文) グロース千鶴子

北海道に来道して30年
エゾフジに登ってエゾマツを見て(あ～)
北海道の大自然に感動した日を思い出しました。

30周年記念号 目次

2016年 冬季号 115

ボラレン活動は楽しくあれ！	会長	春日順雄・・・1
ボラレン設立30周年を祝して	北海道環境生活部部長	宮川秀明・・・2
ボラレン設立30周年を迎えるにあたって	自然ふれあい交流館館長氏家 等	・・・3
ボラレン30周年によせて		村野紀雄・・・4
ボランティア・レンジャー育成研修会の歩み		・・・5～6
座談会	田村允郁、三崎篤、小林英世、佐藤清一	・・・7～12
会員から	30周年を振り返って	富良野市 南部栄一・・・13～15
	30周年に思う	北見市 和泉 勇・・・16
	ボラレンと歩んで	苫小牧市 谷口勇五郎・・・17
	ボラレンの力	むかわ町 小山内恵子・・・18
	小樽峠	小樽市 北嶋 徹・・・19～20
ボラレンの活動色々		・・・21～22
会員から	自然公園とのかかわり方	網走市 法師人春輝・・・23～24
	ボラレンと読み聞かせ	札幌市 菅美紀子・・・25
	柿の歳時記	札幌市 三輪礼二郎・・・26～27
記念講演会・報告		五十嵐一夫・・・28～29
忘年会で聞いてみました		・・・30～32
アポイ岳フォーラムの案内		・・・32
いい案内人になろう		春日順雄・・・33～40
30周年記念事業あれこれ		五十嵐一夫・・・41
事務局便り		事務局・・・42
お知らせ（谷口勇五郎さん冊子）		・・・43
編集後記		・・・43

ボラレン活動は楽しくあれ！

会長 春日 順雄



1. 感謝

ボラレン活動の30年を引き継ぎ、担って来られた数多くの先達の皆様と関係諸機関に感謝申し上げます。その歩みは順風満帆ではなかったでしょう。苦労もあつたでしょう。でも、苦労には楽しみが同居します。この楽しみこそが、ボラレン活動の励みであつたでしょう。

2. 快挙の陰に苦労あり・成功の陰に努力あり～

平成27年、日本の科学は大きな快挙がありました。梶田、大村両氏のノーベル賞受賞。宇宙への夢をいだかせることもありました。「はやぶさ2」が小惑星「リュウグウ」へ向け、12月14日、地球の重力と公転速度を利用したスイングバイに成功しました。2010年に種子島から打ち上げられた金星探査機「あかつき」は、12月7日金星周回軌道への再投入の成功が確認されました。この成功の陰には一女性技術者の努力がありました。1年間、来る日も来る日も再投入のタイミングを見つけるための軌道計算に明け暮れました。快挙の陰に苦労あり、努力ありです。そして、それらを支えたのは、これに関わることが、「好きだ・楽しい」という情緒的な側面だったでしょう。

快挙を支える。これは、今日のボラレン活動にも通じることです。30年の歴史をつないだ快挙を支えてきた先輩からの贈り物は、「ボラレン活動が好き、そして、楽しくあれ」これこそがボラレン活動推進の原動力ですよ！のメッセージであります。

3. ボラレン活動の「好きだ・楽しい探し」をしてみよう。

一つ目は、自然観察会の楽しみです。そこには自然との楽しい対話があります。花の美しさに感動する楽しみ、命をつなぐ巧みに感動する楽しみ、など、沢山の楽しみが待ち構えています。案内の楽しみもあります。参加者と共に自然を楽しむという、同じ目線での双方向の情報交換。案内者をしのぐ知識や体験の持ち主もいっぱい。そんな人の良さを引き出したときの、当人の喜び参加者みんなの和みに満ちた雰囲気は楽しい。

二つ目は、ボラレン仲間との交流の楽しみです。自然観察会に集まってくる会員は、学ぶ気持ちがいっぱいです。言葉には出さないが、「阿吽の呼吸」の雰囲気がただよいます。教えるというトップダウン的な雰囲気はひとつもありません。誰かが語る、質問する、それを聞きのがすまいとする。そんな場が実現しています。

三つ目は、会員みんなの勉強ぶりに感心です。みんな水面下で勉強しているんです。課題を持ち、その探求は楽しいことです。自然には汲めども尽きせぬ謎がいっぱい。世界中の学者も取り組んでいるじゃありませんか。自然探求の道は楽しいことです。

四つ目は、地方研修の楽しみです。一年で一度の再会です。楽しみがあります。懐かしさがあります。同志的な気持ちになります。実に楽しいです。

4. 「好きだ・楽しい探し」をしてみましよう。ボラレン活動をする自分の立っているところが見えてきますよ！それが、ボラレン活動を続ける力です。

北海道ボランティア・レンジャー協議会の設立30周年を祝して

北海道環境生活部長 宮川 秀明

北海道ボランティア・レンジャー協議会が設立30周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

貴協議会は、昭和61年の「北海道ボランティア・レンジャー育成研修会」第1回修了者の有志の皆様により設立され、その後、30年の長きにわたって精力的に活動を継続し、自然観察会の開催や外来生物の駆除など、私たち道民一人ひとりの自然環境保全の意識向上に果たされた功績は非常に大きく、心から敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。

北海道は、豊かで優れた自然環境に恵まれており、この恵みを将来にわたって享受できるよう、自然環境を守り育て、未来へ引き継いでいくことが必要です。

そのため、道では、平成25年3月に「北海道生物の多様性の保全等に関する条例」を制定し、国や市町村、道民や事業者等の皆様と連携しながら、鳥獣の保護管理の推進、希少野生動植物の保護、外来種対策や各種保全活動の推進など、様々な取組を実施しております。

しかし、まだまだ課題も多く残っており、今後も貴協議会をはじめとした関係団体、国や市町村等の関係機関の皆様と連携しながら、自然共生社会の実現に向け、取り組んでまいりたいと考えております。

会員の皆様におかれましては、今後とも自然と道民の橋渡し役として、御活躍されることを期待しておりますとともに、設立30周年を契機として、貴協議会がより一層御発展されますことをお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

北海道ボランティア・レンジャー協議会設立 30 周年を迎えるにあたって

北海道立野幌森林公園 自然ふれあい交流館

館長 氏家 等

設立 30 周年、おめでとうございます。まずは交流館職員一同、会員の皆様に対しまして心からの敬意と感謝を申し上げたいと存じます。私どもとの共催事業であります観察会、ボランティア・レンジャー育成研修会、さらには勉強会、公園のごみ拾いなどの機会に会員の皆様と接し、皆様それぞれがお持ちのテーマに対する熱意、そして自然に対する熱い想いに深く感銘しております。

さて、自然を保護する考え方が浸透し始めたのは、欧米文化の影響が急速に広まる明治期以降のことといえます。明治期に森林の保護を訴えた人物を二人紹介しますと、一人は皆さんご存知の関矢孫左衛門（「北越殖民社」の移住とその後大きな役割を果たす、1844～1917）です。関矢は 1892（明治 25）年、道庁が野幌の森を御料林から官林に編入する計画をしていることを聞き、そうなるに関係する各市町村の財産となり、やがては伐採が進み、森が消失することを危惧し、反対運動を始めました。関矢の主張は、この森林が水資源の涵養、台風など自然災害の緩衝、さらには石狩地方の気候環境に重要であることから永久に保存すべき、ということでした。その主張が認められたのは 1908（明治 41）年のことでした。

もう一人は、北海道史研究に先駆的役割を果たした河野常吉（長野県出身、1862～1930）です。河野は 1902（明治 35）年、道庁が開拓に適していない山林まで入植地に設定することによって本道の森林が著しく減少している状況を危惧し、拓殖政策を批判するとともに、森林の処分（払下げ）を最小限にとどめ森を護るべきとする提言書を道庁に提出しましたが、認められませんでした。

このような自然保護の考え方が広く国民に認められるようになるのは、太平洋戦争後、高度経済成長期を迎える 1965（昭和 40）年代以降のことで、皆様を含め多くの自然保護団体などに継承されてきたといえます。

会員の皆様と私どもの役割の一つは、このような先人の考え方を含め、自然との共生、共存を大切にす思想、文化を次の世代に伝えることにあるものと考えています。その意味でも今後も皆様のご指導、ご協力が頂けますようお願い申し上げます、お祝いの言葉といたします。

北海道ボランティア・レンジャー協議会30周年によせて

村野紀雄

北海道ボランティア・レンジャー協議会（ボラレン）が30周年を迎えられ、ここに30周年記念誌が発行されますことをお祝い申し上げます。

1986年、ボラレン発足当時、私は、北海道野幌森林公園事務所（当時、開拓記念館内に事務所があり、開拓記念館とは別の組織であった。）に所属していて、ボラレンの母体となったエゾマツ会時代から皆様に大変お世話になって今日にいたっています。

このたび、春日会長からメールをいただいて、改めて、会誌エゾマツのバックナンバーを読み返し、ボラレンがこれまでの30年間、様々な困難に果敢に立ち向かいながら、野幌森林公園をメインフィールドにしなが、全道各地で「人と自然の橋渡し」のために多様な活動を展開してこられた歳月を思いおこしています。変化の激しい時代の中で、観察会と下見調査、研修会、オオハンゴンソウ防除などの自然保全活動を、1,000回余（支部活動を含む）開催して、累積で10,000を越える参加者に自然を橋渡しされ、興味をそそる内容の多い、手作りの会報をこれまで115号+特別号の多くを発行されて、会員に優れた知見、多くの情報を発信されてこられたことはすごいこととあります。ボラレンの活動を進めてこられた歴代の役員、会員の皆さまの大変なご苦勞があったことを覚え、心より敬意を表します。

近年、世界の喫緊の課題の一つとなっている生物多様性の保全のための戦略が国や地方自治体で策定されてきています。2014年春に公表された生物多様性さっぽろビジョンでは、生物多様性の意味を、①種の多様性（種間の多様性）、②遺伝子の多様性（個性が多様であること）、③生態系の多様性（つながりの多様であること）としてとらえ、その価値として、①すべての生命の基盤（生き物が支える酸素循環など）、人の生活の基盤（衣食住などの資源として）、②豊かな文化の根源（人の精神形成、地域文化の土台）、③人の生活の安全の維持（水源涵養、CO₂吸収、土砂崩壊防止など）としてとらえています。

それは、自然の、それぞれの地域の在来の生き物を大事にしようとするところでもありますから、ボラレンのみな様が実践されてきていることへの応援メッセージと思います。

これからも、皆様のご努力が野幌の森の自然の保全にも実り、また、ご活動が全道各地に広く、より多様に、楽しく、また楽しまれて展開されるようご祈念申し上げます。

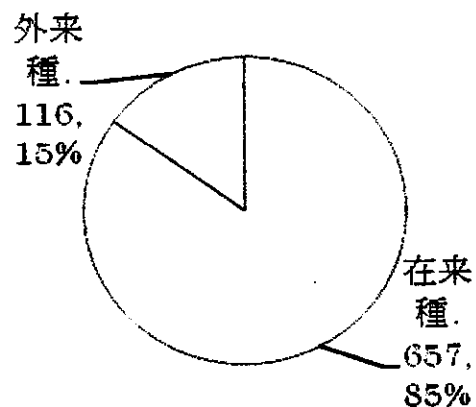


図 野幌森林公園の植物種多様性
全 773 種 （記録：2014 まで）

北海道ボランティア・ボランティア育成研修会の歩みとボランティアの歩み

回数	年度	月日	開催支庁	場 所	参加者	実施主体	ボランティア委員長
1	1986年(昭和61)	8/29~8/31	石狩	支笏湖湖畔国民休暇村 「エゾマツ会」会則執行	48人	北海道	川村千東
	1986年(昭和61)	12/05		会報誌「エゾマツ」1号発行			川村千東
	1987年(昭和62)	06/01		国民宿舎ユートピア大沼	51人	北海道	川村千東
2	1987年(昭和62)	8/21~8/23	渡島	ボランティア・ボランティア「エゾマツ会」を北海道ボランティア・ボランティア協議会に改称			川村千東
	1988年(昭和63)	7/29		釧路	45人	北海道	川村千東
3	1988年(昭和63)	7/29~7/31	釧路	シラルト湖畔町営緑いの家	43人	北海道	川村千東
4	1989年(平成1)	7/19~7/21	上川	旭岳温泉町営ホテルえぞ松			川村千東
5	1990年(平成2)	7/20~7/22	日高	日高グラントホテル	125人	北海道	川村千東
6	1990年(平成2)	8/03~8/05	石狩	北海道農協学校研修室			川村千東
7	1990年(平成2)	8/24~8/26	釧路	シラルト湖畔町営緑いの家			川村千東
8	1991年(平成3)	8/01~8/03	網走	丸瀬布森林公園いこいの森			川村千東
9	1991年(平成3)	9/05~9/07	後志	羊蹄青少年の家	85人	北海道	川村千東
10	1991年(平成3)	10/03~10/05	石狩	当別町道民の森			川村千東
11	1992年(平成4)	6/11~6/13	十勝	芽室町嵐山スカイラーク			大友 健
12	1992年(平成4)	7/23~7/25	空知	芦別健康の森	75人	北海道	大友 健
13	1992年(平成4)	8/08~8/10	胆振	白老町ポロト自然休養林			大友 健
14	1993年(平成5)	8/06~8/08	釧路	厚沢部町土橋教育林(御虫温泉)	33人	北海道	大友 健
15	1994年(平成6)	7/27~7-29	上川	美深町美深森林公園(美深温泉)	44人	北海道	大友 健
16	1995年(平成7)	8/11~8/13	十勝	国民宿舎 東大雪荘	28人	北海道	大友 健
17	1996年(平成8)	7/19~7/21	空知	はな工務(月形町)	38人	北海道	大友 健
	1997年(平成9)	5/01		ボランティア10周年記念事業「野幌森林公園自然観察ガイドブック」発行			大友 健
18	1997年(平成9)	7/18~7/20	後志	積丹町文化センター	39人	環境財団	大友 健
19	1998年(平成10)	7/17~7/19	日高	アポイ山荘	37人	環境財団	大友 健
20	1999年(平成11)	7/16~7/18	上川	国立大豊青年の家	32人	環境財団	大友 健
21	2000年(平成12)	7/07~7/09	釧路	北海道厚岸少年自然の家	18人	北海道	川端 治
22	2001年(平成13)	6/30~7/01	網走	網走ホテルビューハーブパーク悠遊亭	21人	北海道	川端 治
23	2002年(平成14)	7/12~7/14	後志	ニセコいこいの村	29人	北海道	川端 治
24	2003年(平成15)	7/11~7/13	空知	芦別温泉スターライトホテル	18人	北海道	川端 治
25	2004年(平成16)	8/20~8/22	留萌	留萌支庁	14人	北海道	川端 治
26	2005年(平成17)	8/12~8/14	日高	日高高原荘	18人	北海道	川端 治
27	2006年(平成18)	7/21~7/23	胆振	登別ナイチャーセンター観山フォレスト	17人	北海道	田村 允都
	2006年(平成18)	9/02~9/30		ボランティア20周年記念事業「記念会写真展」自然ふれあい交流館ギャラリー			田村 允都
	2006年(平成18)	9/18		ボランティア20周年記念事業「記念会員研修会」講師：五十嵐恒夫氏			田村 允都
	2006年(平成18)	10/09		ボランティア20周年記念事業「記念講演会」講師：大橋弘一氏			田村 允都
28	2007年(平成19)	9/28~9/30	石狩	野幌森林公園 自然ふれあい交流館	30人	(一財)北海道関係の村	田村 允都

回数	年度	月日	開催支庁	場所	参加者	実施主体	ホラレン会長名
	2007年(平成19)	12/12	ホラレン20周年記念事業「自然観察ハンドブック」発行				田村允郁
29	2008年(平成20)	9/26~9/28	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	16人	(一財)北海道開拓の村	田村允郁
30	2009年(平成21)	8/28~8/30	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	26人	(一財)北海道開拓の村	田村允郁
31	2010年(平成22)	10/01~10/03	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	22人	(一財)北海道開拓の村	春日順雄
32	2011年(平成23)	10/21~10/23	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	28人	(一財)北海道開拓の村	春日順雄
33	2012年(平成24)	8/24~8/26	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	15人	(一財)北海道開拓の村	春日順雄
34	2013年(平成25)	10/25~10/27	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	23人	(一財)北海道開拓の村	春日順雄
35	2014年(平成26)	9/26~9/28	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	13人	(一財)北海道開拓の村	春日順雄
36	2015年(平成27)	10/02~10/04	石狩	野幌森林公園自然ふれあい交流館	13人	(一財)北海道歴史文化財団	春日順雄
	2015年(平成27)	10/24	ホラレン30周年記念事業「記念講演会」講師:横沢俊氏				春日順雄
	2016年(平成28)	02/末	ホラレン30周年記念事業「自然観察ハンドブックⅡ」発行予定				春日順雄



《座談会》 ボラレンの過去～現在～未来

2015年11月14日（土）

自然ふれあい交流館にて

長年役員として10周年、20周年、30周年とボラレンを支えて下さっている田村允郁さん、三崎篤さん、小林英世さんをお迎えして広報部の佐藤清一さんが進行役の座談会です。



<ボラレンに入会したのは>

佐藤：ボラレン30周年を迎えるにあたり、加入の動機など過去に戻って話していただきたい。田村さんからどうですか。

田村：僕が入会したのは三崎さんと同期です。1991年（平成3年）当別の道民の森での育成研修会です。あの当時は年3回育成研修会がありました。それから25年遊ばせてもらっています。

三崎：私は丁度その頃帯広に居て、“道新”に案内がありました。定年後一緒に森を歩いたら楽しいのではないかと思い受けてみました。転勤族だったのでそのまま時間が過ぎました。その後、ボラレンの仕組みを知らずに



田村允郁さん

観察会へ出ましたら皆さん立派な案内をされていてこれは大変だと考えを改めようと思っているうちに今まで来てしまいました。未だ悩んでいます。

小林：丁度その頃、旭川から札幌へ来たばかりで子供たちが小さくて山登りには行かれないので山の知識をいかせて子供と一緒にできることを考えていた時期で第9回目の育成研修受講です。修了後一通りのレクチャーを受け野幌に来て自分が何も出来なかった。植物も高山のものと全く違っていたなあ、それから徐々に観察会に参加して今に至っている。

<あの頃は理論のみの勉強会だった>

三崎：あの頃育成研修会のやり方は今と考え方が違うのではないのでしょうか？机上の理論のみで勉強会のような感じだった。自然に対する接し方は教えられて無かったが今は実践的であり役立つ研修だと思います。

小林：土壌の構造とか全般に基礎講習が主な内容だった気がする。

田村：平成3年当時はそうそうたる講師を迎えての講習だった。それはそれで大変ためにはなつたけど。

佐藤：僕は上川・大雪で受け、講師の川端さんや五十嵐さんがボラレン会員でもあり、ボラレンにこういう人がいるのかと思い加入しました。

小林：それ以降ボラレンからも講師を派遣するようになっていった。徐々に先生役が多くなってボラレンに関わる分野が広がってきた。

田村：最近の育成研修会は自然ふれあい交流館との共催になったので大変だが会員の勉強になっている。

<オホーツク支部誕生！>

佐藤：過去のことでよかった思い出や不十分と思われたことなどありましたら？

小林：楽しいことはあまりなかったなあ。(笑) しいて言えば、オホーツク支部が出来て札幌近辺ばかりだった研修に広がりが出てきたことで会員同士が繋がった。しかし全道に協力を仰いだが地方に行くと『なんで自然を観察するのか』という雰囲気があり旭川の見本林で観察会をやった時は人が来なくて無理でした。函館でもやってみたが企画段階でも会員は動かなかつた。ず〜つと苦勞の連続だった。会としての運営も厳しかった気がする。

<会員研修が出来るまで>

佐藤：研修の東大演習林は楽しかったですが・・・

小林：支笏湖を皮切りに田村さんの時代に会員研修が出来上がって行った。南部さんのご厚意で東大演習林研修は始められた。それから徐々にオホーツクや旭川、十勝でも積極的に動いてくれて全道の広がりができた。

三崎：足（交通）の手段が難しい、研修の場所まで時には私も会員を乗せて行ったこともあるが・・・会員は年配者が多いので交通の便を確保しないと参加しにくいのも一因ではないだろうか？

小林：地方でやる観察会が会員の研修として残っていく場合がある。いい例は鷓川で『観察会をしましょう』とやったことがあるが一般参加者は誰もいない。集合したのは会員のみで自分たちのいい研修となりずっと継続されている。また胆振地方の研修会は日帰りということもあり大勢の参加者を得ている。



三崎 篤さん

<最近の観察会の傾向は>

三崎：こういう活動は長い年月をかけないと熟成しないのかと思う。今年春の自然ふれあい交流館との共催観察会では約200人の参加者があり記録を更新した。長い活動が実ったと評価したい。ボラレン主催の観察会も浸透してきて恵庭の観察会終了後に『やっぱりボラレンの観察会は素晴らしいね』という声が聞こえてうれしくなった。

小林：11月3日のボラレン主催観察会も40名参加で保険料が黒字になったとバカなことを言ってしまった。いつも10名前後で保険料が赤字だった。



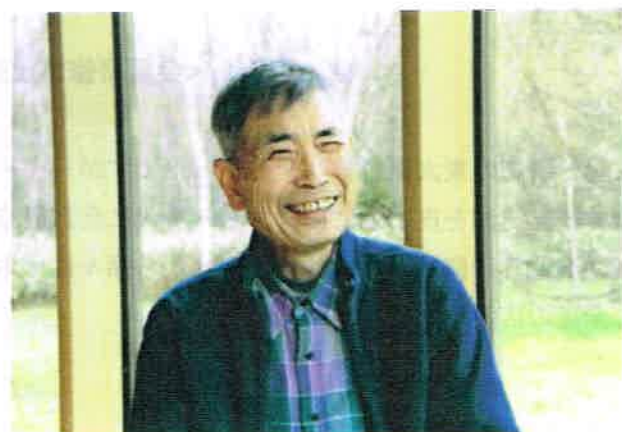
小林英世さん

<活発になって来た活動>

佐藤：現在の観察会、アポイ岳や鷓川での活動、オオハンゴンソウ防除、セイヨウオオマルハナバチ駆除や田村さんが始めてくれた野幌森林公園自然情報「自然観察NOW」の発行、観察会下見を義務付けしたことなどについて。

小林：オオハンゴンソウを抜くとササ原になりますね。(笑)

三崎：そうですね。



佐藤清一さん

小林：強いて言えば我々の力量というか続けていくのには限度があるので・・・

田村：労力の範囲を広げないで野幌のみでの活動を希望するなあ。

三崎：この活動の最初は“道”や“環境庁”の働きですか？

小林：いや、違うよ！！自主的なもので動いている。

田村：本来、石狩森林管理署が考えるべきだが、ボラレン先取りでボランティアしている。どうだとは言わないが、我々の存在価値は行政機関にも理解してほしい。石狩森林管理署は車を出すなど協力してくれているので有難いよね。

三崎：内輪だけでやっていたはどうでしょう？ドンドンするなら理解度を広げることも考えていかないと無意味になってしまう。オオハンゴンソウを抜くという奉仕活動に一般の人は関心を寄せてくれない。

田村：労力があるものは一般の人に理解してもらうのは難しい。

小林：セイヨウオオマルハナバチの駆除は一過性でブームが下火になってきたのでは？

田村：これらの活動はボラレンの活動として求めるより自主的な奉仕活動にしたほうが継続的に良いと思うし、一般の人にもどうですかという程度の方がよいのでは？本来の観察会を主にして『行って見ようかな』という受け皿にしてはどうかなあ？

小林：この30年の間に活動は広がったので、すごいと思う。

三崎：ボラレンの奉仕活動をしていることがボラレンの加入に繋がっていることもあるので大事にして、観察会の参加者にも活動のP・Rをしないと活動には繋がっていかないだろう？

<会員の知識はすごいが・・・>

佐藤：観察会を重視してきて案内時に関わる下見や研修をやっているが何かありませんか？

小林：皆、勉強してきているし、知識もすごい。自然観察NOWはネタ帳になる。

田村：下見の位置付けは凄くいいこと。下見は自慢していいことだと思う、下見は研修の場でもあり当日のタイムスケジュール、安全確認、それは意義のある事だと思う。ただ近頃、感じることもある。観察会が一般の人にも会員の間でも二極化になっているのではないだろうか？微に入り細に入るマニアックな人と一方で森を楽しみながらソコソコにエゾマツやトドマツの違いが分かる程度くらいでいいという人もいる。会員の中にもいろいろ出てきている。我々ボラレンの観察会の目的、原点をどの辺に求めるのか？興味のある人はいいが、どの程度森の中の情報を伝えていくのか。二極化して来ている現在、参加者にどこまで伝えていくか。森の中を楽しむということはガイドする人の考え方もあるがガイドとしてアマチュアであることだしソコソコ収めて行くことも考慮したほうがよいのではないだろうか？

小林：肩肘張らずに自然との橋渡しなのだから、さわりだけやって森に一步興味を持ってもらうのでいいと思う。

田村：参加してくれた人に何を伝えるか？語るか？現在の重箱の隅をつつくような観察会を僕は好きでない。

小林：もう一度初心に戻ってもいいのではないかと？

三崎：森を楽しむ原点も必要かもしれない。

小林：森の基本的なことが分かっていないで森に入っているのではないだろうか？植物名ばかり、又プログラム作りに重点を置き過ぎている気がする。

三崎：11月「秋のありがとう観察会」のゴミ拾いに初めて参加した人がいたが楽しんでもらった。そのような人を大事にしたい。



<支部活動の現状>

佐藤：支部の小樽、オホーツク、支部に準ずる道北、十勝などではどうでしょう？

三崎：唯一小樽支部の活動は順調で活気があり上手くいっている。

小林：オホーツク支部は少人数だが地元に着したユニークな活動をしていると思う。

田村：地方での活動はなかなか厳しいものがある。

<次に向けて>

佐藤：自分たちの仲間だけでも地道だが活動していけば力がつくのではないかと？高望みしないでやっていくのも40周年に向けての活動に思えるが。

三崎：ずっと地方会員だったが転勤先々に「エゾマツ」が送られてきたのが繋がってきた理由のひとつでもある。最近の「エゾマツ」は、面白くなって来たように思う。

田村：地方会員には三崎さんの話が当てはまる。参加できない人に情報を届けることは活動の充実となる。

佐藤：地方や新しく入会した人から発信してもらうことも力を入れてやっていきたい。苫小牧の谷口さんは「エゾマツ」に投稿という形で繋がっている。

小林：平取の川村さんの植物調査も活動の内容が見えて歓迎したい。

田村：ボラレンには豊かな経験を持った人が大勢いるので、上手くバトンタッチをしていけばボラレンの活性化はできる。



<現状は>

佐藤：毎年、新会員も入会していますし今後は？

田村：自覚をしてリタイアするのも必要だと思う。

小林：役員が変わって来た。長く役員をやって来て周囲を見ると新陳代謝している感じがする。

三崎：会員は平均150名前後、因って年間45万円での運営はたいしたものだが会費が滞っているのが危機感を感じる。

<進歩していると思う>

佐藤：定着してきた活動が評価されて30周年の事業は札幌市サポートホット基金の助成を受けることが出来ました。ご存知の30周年記念講演会も皆様のご協力が無事終了しました。他に質的に高めることとかありませんか？

小林：初めから考えると進歩していると思う。研修部が機能してきている。昔は観察会の仕切り程度だった。これからもっと良くなっていく。いい意味で挑戦してきている。意欲のある人がいっぱいいるし。

三崎：観察会でも広報誌の発行でも手伝ってくれる人が大勢いる。

田村：昔は協力の声をかけても三崎さんだけで細々と広報誌の発行をしていたが、そんな中でも年4回発行の「エゾマツ」、ずっと継続しているのは自慢のひとつ。

<知的好奇心を持って発信>

佐藤：オブザーバーの方で何かありませんか？

熊野：私も長い間、関わって来たけど皆さんの比でないと思いました。皆さんお元気で情熱を持ち好奇心に満ちてらっしゃる。

安倍：これからの高齢化社会では生涯学習が益々重要になると言われています。私たちボラレン会員が知的好奇心を持って学び続け、その活動を発信することで、子どもたちや若い人が「年を重ねたらこんな素敵な人になりたい」、「このような素晴らしい活動を自分もしたい」と思ってもらえるのではないのでしょうか。

佐藤：今日はどうもありがとうございました。

(写真・安倍隆、文責・内山恭子)

ボラレン30周年をふり返って

富良野市 南部 栄一 (会員番号2112)

この原稿依頼が届いてから自分とボラレンについて考えてみました。

北海道ボランティア・レンジャーの養成研修が始まったのは1986年(昭和61年)でした。この頃の記事を開いて観ると日本でも自然保護運動が全国各地で自然発生的に起こり、その結果、白神山地が森林生態系保護地域に設定されたり、釧路湿原が28番目の国立公園に指定された時代でした。

更に道内では多くの活動家の運動により知床の国有林伐採が中止され、美瑛町の美瑛富士スキー場建設が中止になった時代でもありました。

そのような時代背景の中で横路孝弘知事がボランティア・レンジャー養成を行うと言うので多くの方々が研修に応募しました。当時自分が在住した南富良野町では積極的に啓蒙した結果、自分も含めて旅館業、農家の方などが応募しましたが自分以外の2名が選考されました。自分は翌62年に応募、お盆過ぎの大沼での養成研修を受講終了しました。この当時の受講者は先に述べたような時代背景もあり自分も含めて自然観察指導者を目指すと言うより自然保護運動指導者を目指す目的の方々の受講者が多かった印象がありました。

受講生も多種多彩で今考えれば個性的・ユニークな方も多くその一人は1期生では当時東大富良野演習林で教務主任としてバリバリの現役教官であった宮本先生も受講生の一人でした。後に数年に渡り東大演習林の最高峰大麓登山研修、広大な演習林で森林の数十年、数百年のドラマ再現の倒木更新や拓伐林の説明、枝打ちの実習、更に学生宿泊施設をボラレンに開放、学者らしくない朴訥な人柄は懐かしい思い出です。先生はどんな思いで養成研修を受講したのだろうか機会あれば聞いてみたいと思っています。尚、氏は東大退官後も富良野に在住、時々お会いするのですが悠々自適、マイペースで暮らしています。

自分と同じ2期生では故野月肇雄氏が印象に残る方です。養成講習時から活動活発な方でしたが後に東大演習林の「どろ亀先生」こと高橋延清林長の教えを旗印に「ボランティア・レンジャー 山川草木の会」を立ち上げ全道各地に植樹・植林を展開、25年近く経過した現在は北大藤原晃一郎名誉教授がその灯火を燃やし続けています。現在富良野市、南富良野町始め全道に野月氏によって播かれた苗木が森とはいかなくも林位に育っています。現在のボラレンとは別の道を選択した方ですが自分には鮮烈な印象を植え付けた方でした。

自分自身の活動については受講後しばらくは臨床獣医師としての仕事も忙しく山岳へ向う暇があってもボラレンについては幽霊会員でした。

そうこうしている内に思い出したように参加した行事で登山、自然保護等に造詣の深い方々の御交誼を頂いたり、上川管内のボラレン仲間、更に環境省の環境カウンセラー（共に個人登録、自然学習・観察・保護部門）仲間である当麻町の野呂、下川町の宮田さんとの家族ぐるみの付き合いなど当初はボラレンを通しての交流でした。唯、上川の場合地形的に広過ぎて支部結成にまで至らなかったのが残念です。現在、旭川の芦田さんが結成に向け動いているので上手くいけばの思いで一杯です。

更にその後、数年に渡って東大演習林での研修が行われ参加した会員の皆さんとの大麓山、富良野西岳、原始ヶ原登山、森林研修、夜の飲食研修を通して一層ボラレンは自分にとって身近になってきました。また丸瀬布研修、白滝研修、朱鞠内北大演習林での研修も素晴らしい思い出です。

それに自分にとってボラレンに入って最大の収穫は観察する喜び、楽しさを学ぶ機会を得たことです。それまでは登山が唯一の趣味でしたがその時々ピークハンターが目的であり、登頂するのに2～10時間、山頂滞在数分、そして下山がパターンでした。だから最初はボラレン行事に参加しても登山歴は古いにも関わらず動物はともかく植物については全く解らず、同じ登山を嗜む田村、春日、北原、小林、五十嵐、佐々木さんなどの解説を羨ましく尊敬の眼差しで眺めては、登山のたびに必死に図鑑を眺め、写真を撮り同定に努めたものでした。

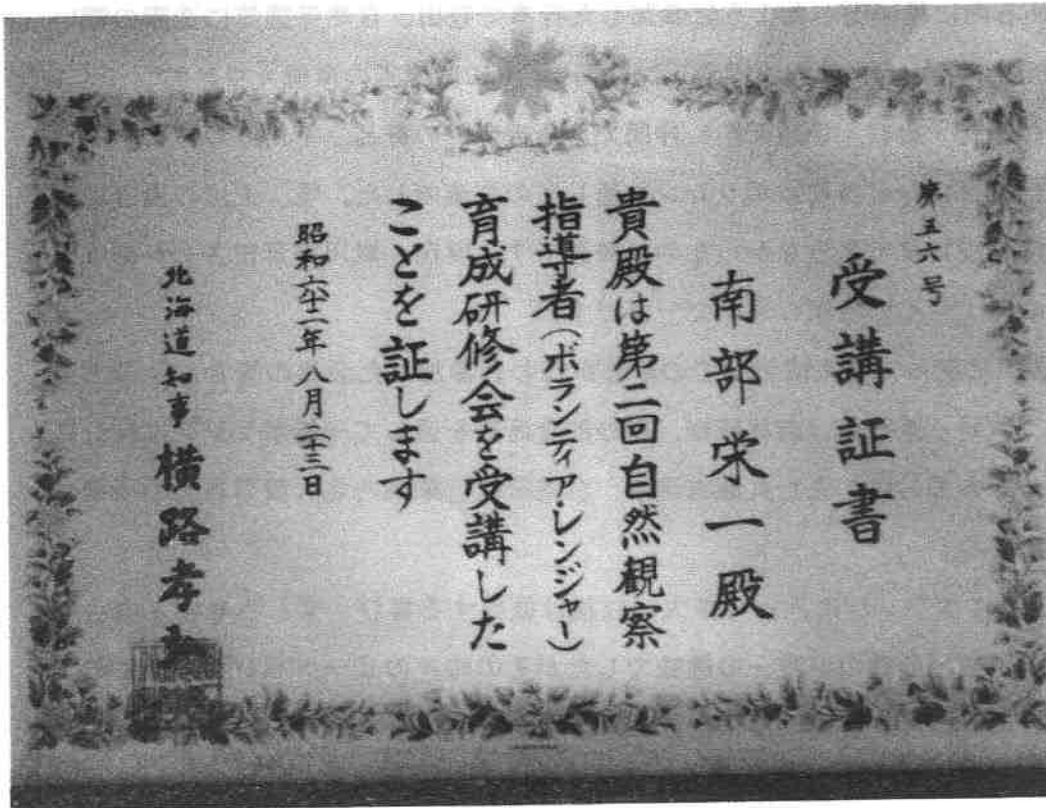
その後環境省の自然公園指導員（大雪山国立公園地区）、日山協の自然保護指導員、国有林パトロール、地球温暖化調査の花リサーチ、セイヨウオオマルハナバチ捕虫員などを任命されたり引き受けたりしたのもボラレンで観察の面白さ楽しさを学んだ故と思っています。

しかも平成27年（2015年）総会前に自分の記録の発表の機会さえ与えて頂いたこと感謝の気持ちで一杯です。

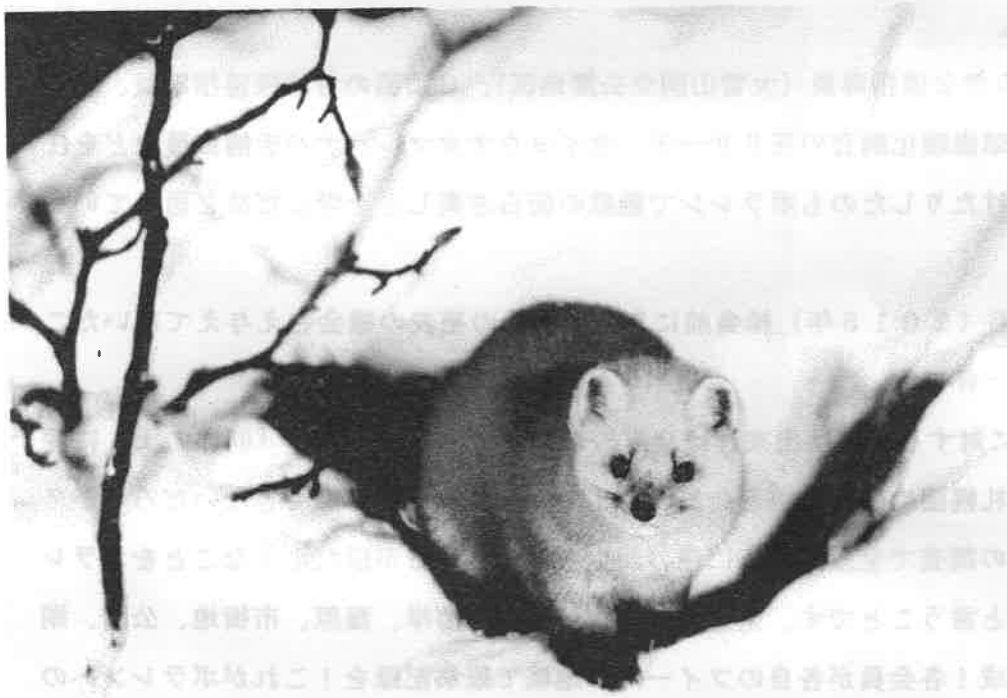
自分のボラレンに対する希望は出来れば全道の市町村にいるであろう「同好の士」に呼びかけを強くして札幌圏に偏っている会員のウイングを広げることができないだろうか？と道新では5年毎の調査で全道同じ日に花の調査を行っているが似たようなことをボラレンができないか？と言うことです。全道規模の山、河川、海岸、湿原、市街地、公園、湖沼等の花マップ作成！各会員が各自のフィールド地域で観察記録を！これがボラレンへの注文であり希望です。

更にこれまで数回の投稿や写真展示の際に助言下さった佐藤さん、熊野さん、内山さんにも感謝の気持ちで一杯です。

今後40周年、50周年目指して益々の発展を祈念しています。



思い出の受講証書です



自宅の近所で数日通いつめて撮ったクロテンのワンショット写真

北海道ボランティア・レンジャー協議会 30 周年に思う

オホーツク支部 和泉 勇

道ボラ・レン協議会 30 周年おめでとうございます。

私が地方幹事の時、協議会の総会に札幌まで車で出席し終了後は役員の方のご好意により二次会・三次会と街へ流れた記憶が今も鮮明に思い出されます。

協議会が今も成長を続けている事は会員の皆さまの努力と実行力があつたからこそ今の協議会があるものと敬意を表したいと存じます。

さて、私達の支部は協議会の意向を踏まえて支部結成の機運が高まり早期の結成の声が上がりはじめる中、結成したかろうと何のメリットがあるのか当時は雲を掴むようなものでした。

これからも協議会と共存するには私たちの地理環境から考慮していかなければなく、会員が網走振興局管内に散在し地理的環境から協議会の諸事業に参加することが時間と経済的に難しい制約があり、支部がなすべきことはボラ・レンとして独り立ちできるように各人が現地での実務を体験し身につけさせて、自信を持つてもらうためのお手伝いをするを基本としました。

また、会則は協議会の会則を管内の実情に合わせるための是正を行いこれを総会に提案して承認されました。

あれから 27 年目となりますが、その後、何らの進歩のなさには心苦しいです。これからは若い人を軸に会を展開し、新しい風を送り込める体制を確立して活性化に努め協議会のご指導と各関係機関の今後のご支援とご協力を得ながら共に繁栄させてゆく覚悟です。

結びになりますが、これからも協議会の益々のご発展をご祈願申し上げ 30 周年記念のお祝いの言葉と致します。

ボラレンと歩んで

苦小牧市 谷口勇五郎

もう15年も前のこと、ボラレンの養成講座が終わった時、ボラレン入会の誘いがありました。それは当然のことと思ひ、入会しました。当時、ボラレン主催の観察会は年何回も行われていましたが、いずれも野幌森林公園でした。ガイドのために苦小牧から出かけることは、時間的にも経費の上からもできません。せいぜい、機関紙の「エゾマツ」をチラッと見る程度の付き合いが3~4年も続きました。振替用紙が送られてくるたびに、退会のことを考え、迷っていました。

白老町の某氏が「白老の自然」という自然情報紙（B4の表裏1枚）を毎月発行していました。時々、原稿募集をしていたのを思い出し、2003年2月、錦大沼公園の観察会で取り扱ったカワゲラ類について、150字ぐらいの文を初めて投稿して見ました。すると、3月号の表の下の方に、イラストまで添えて、載せてくれました。自分の名前が出て、しかも、数十人もの読者に読んでもらっているものと思ひ、すっかり嬉しくなりました。読者がいなければ、他人への配慮が欠ける単なる日誌のようなものになります。それ以来、毎月、1,000字程の「文」を投稿し続けています。現職時には、できるだけ文を書くことを避け、止む終えない時はできるだけ短くしておりました。そこに投稿し続けているうちに書くことが勉強にもなるし、だんだん苦痛でなくなってきました。もちろん、間違いを訂正することはしばしばありました。

せつかく会員なのだから、何かできないかと考えました。文を書くことがだんだん慣れてきた時期でしたので、2006年の後半あたりから、書くことで参加しようと思ひました。その後、毎回投稿を続けようと思ひています。「エゾマツ」は、何人もの会員がそれぞれの思ひを込めて投稿していることが解るようになりました。「エゾマツ」には、ガイドの参考になることが多く載せられています。最近ではいつも、赤線を引きながら、ガイドに利用できそうなところを探しています。誌そのものも、手間や経費を掛けない印刷の体制は大変よいと思ひます。内容で勝負するということです。

書くことがだんだん面白くなり、余り時間もとらなくなってきました。パソコンを使えるようになると、推敲も簡単にできます。先日「この文」の依頼を受けた時、以前であれば「困った、しかたがないな」となるのですが、今回は、本当のところ「嬉しい、さあ始めるぞ」と、生き甲斐を与えてもらひ感謝の気持です。

自然観察・ガイド・研修などを行い、自然ガイドとして、一般の方々やガイド仲間の方々に對し、10年以上も文を書いています。そうした方々に適切な「エッセイ風の自然のガイド」を書くためには、できるだけ間違いがないこと、興味を持ってもらえること、に心掛けています。書籍やネットで調べ、時には関係者に問い合わせることもありますが、不十分なことは常にあると思ひます。自分にとっては、活動の記録であり、勉強であり、何よりボケ防止には有効なものと思ひています。

昨年と今年、当地で多数の会員を迎え、研修会を行いました。いつも、真面目に学ぼうとする姿勢に敬意を表します。2016年夏には、街中の公園で胆振地区の自然観察会を行う予定です。自分にとって、新たな参加の形が始まるように思ひます。

自然ガイドをしている限り、これで満足と言うことは無いように思ひます。自然は尽きない好奇心を満たす宝庫です。最近、シダの本が出ました。地味な植物ですが、それなりの面白さがあります。自分の健康維持のためにも会員の方々と手をつなぎ、できることから参加することが大事と思ひております。

北海道ボランティア・レンジャー協議会の力

むかわ町 小山内 恵子

胆振のむかわ町で「ネイチャー研究会 in むかわ」として活動しています。中央での行事にはなかなか参加出来ないでいますが、いつも「むかわ研修」などでお世話になっています。

私とボラレンの関係は確か、1998年のアポイ研修会です。自然学習は初めての経験で、一つ一つのカリキュラムがとても印象的でした。私の気持ちが自然を学ぶことを求めているのでしょうか。何よりもとても楽しかった。中でも思い出されるのが、交流会の中で、講師の方が「鶴川河口はとてもすばらしい所なのに、環境の変化によって、シギ・チドリ類が見られなくなりそうだ。地元の方に頑張ってもらいたい」と熱心に話し掛けられたことです。その時の私はバードウォッチングなど数回したに過ぎなかったけれども、おっしゃることは良く理解出来、私は「託されたのだ」と思いました。

知識も知恵も無く、只、見守るだけの私たちの挑戦が始まりました。けれども、熱意は少しも冷めることなく、当会の中にあります。解らないことを教え合い、時には役場の方が、河川事務所の方が教えてくれました。河口に通うことで、河口のすばらしさを実感し、教えていただいたことを体感しました。

2003年に90%失われた河口干潟の代替として「人工干潟」(2,7ha)が造成されました。しかし、わずかに残された河口干潟も新しく生まれた人工干潟も保全するのは大変です。河口は海と川との微妙なバランスの中に成り立っているのです。特に人工干潟は2006年から植物の侵入が顕著になり、人工干潟内植物の調査開始。そして、2010年から継続的に草刈を実施しています。

「むかわ研修」の中で「人工干潟内植物除去」に「手を貸してください」と発言すると快諾していただきました。干潟での草刈は思いのほか、きつい作業です。ぬかるみで草を刈り、それを干潟外草地に運ぶのですから。それなのにボラレンの方たちから「ご苦労さま」とねぎらっていただき、「お菓子」を渡されたのです。「温かな気持ち」が込められていました。当会もその「温かな気持ち」を参加者に伝えたくて、次年度から「豚汁とおにぎり」を提供しようと思ったのです。

初めての研修で、むかわ研修で、また、毎日のように配信してくださるリングメールからもボラレンのパワーを感じています。それはボラレン会員の一人一人の気持ちから成り立っているものです。大上段ではない、普段着の自然保護。また、そんな自然保護を助けてくださる思い。いつも、有難く感じています。

30周年を迎えると聞きました。人の人生にいろいろなことがあるように、きっと、平坦な30年ではなかったかと想像します。会員でいられたこと、当会を支えてくださっていること、ここに感謝申し上げます。

小樽峠

小樽市 北嶋 徹

小樽峠の名をご存知でしょうか？

勝内川の上流にある旧奥沢水源地のさらなる上流に小樽名勝のひとつ「穴滝」があります。そこからさらに山道を登り小樽市街地を見渡せる尾根筋上に、この峠があります。昔は、小樽と赤井川村の交通の要として重要な役割をした峠でした。

古くは、日高シブチャリを根拠とした太平洋側のアイヌとのタカシマ、ヲシヨロの日本海側アイヌの接点をもった道ともいわれていますが、確たる記録はありません。史実として現れたのは明治21年（1888年）新潟県出身の長谷川悟という人が小樽奥沢村から赤井川に入植している記録がありますので、この時すでに、この峠が使われていたと思われます。（赤井川史）この峠から常盤ダムへと流れる川の名前が「小樽川」と呼ばれています。

明治以降に赤井川に入った入植者の方々は「小樽への道」として峠が認知されたと考えられます。明治28年（1896年）に陸軍陸地測量部作成の小樽周辺部の地形図を見ると道筋は記載されているが峠の名称はありません。小樽川の名や周辺の沢の名称が「青木沢」「豆腐屋沢」といった和名でありアイヌ語由来の名はありません。推測として、この峠の繁栄は明治30年以降からではないかと思われます。

それを裏付ける資料が、小樽市総合博物館メールマガジンに記載されている。

『小樽峠は、日露戦争により軍事道路として整備されました。大江村上山道（現在の仁木町大江～稲穂峠下）から赤井川都を經由する現在の道々1022号線が余市～塩谷の海岸線を走る道の待避線として計画・整備され、小樽への経路は小樽峠をこえるものとなります。大正7年発行の地形図には「小樽峠」の名称と道路、しかも「達路」（国道、県道につぐランクの道）として表記されています。赤井川村東側に入植した人々にとって、当時「大都会」であった小樽に近いという入植地選択の大きな決め手であったといわれ、夏だけでなく、冬もスキーを履いて買出し、収穫物の運搬、病人の搬送など小樽峠を利用していました。』

この峠には、お宝が、今でもひっそりと眠っています

昭和7年、小樽峠より東側1Kmに位置する松倉岩付近にて、金、銀、銅、亜鉛を目的に採掘が行われましたが、昭和10年に重晶石が大量に埋蔵されていることが分かりました。大阪にある堺化学工業による重晶石を対象とした操業が開始されます。昭和12年になると、小樽市天神町と鉱山との間に索道が開通し、パーライト製造乾燥機や粉碎機、洗鉱機が設置されました。

当時の重晶石（硫酸バリウム結晶）は、強化ガラス製造原料の配合物である炭酸バリウムとして潜望鏡や兵器光学ガラスなど、国家プロジェクトの名の故に大量の採掘が行われました。終戦と同時に一時休山しましたが、昭和22年に再開、重晶石（硫酸バリウム結晶）のみ採掘し昭和30年～40年前期にかけ国内の重晶石の大半を供給した記録があります。昭和11年～38年の精鉱量は22万7212t、平均品位86パーセント、昭和47年に国内経済情勢の変化と資源の枯渇を理由に閉山しました。化学原料としてリトホン、塩化バリウム、炭酸バリウム、硫酸バリウムなどの製造用に現在も広く使用されている。現在でも、勝内川流域にある堺化学工業関連会社（旧共成製薬）カイゲンフアーマ社は、X線造影剤である硫酸バリウム生産量は日本一を誇っています。閉山理由の一つとされている資源は、今でも20数万t、それも30万tに近い量が地下深く静かに眠っています。どうやら真相は、資源の枯渇より国内事情による生産コストに原因がありそうです。

『昭和初期には、架空索道で小樽から糞尿（下肥）を赤井川に運び肥料とし、弾丸列車を倶知安から走らせる計画や運動が起きたりします。また、現在、小樽市民が利用している水の一部は、この峠の直下のトンネルを通過して天神町に運ばれています。小樽峠は、「小樽赤井川線機械化道路」の昭和26年（1951年）の開通。後の国道393号線（昭和57年）の改称により、その役目がおわります。しかし、赤井川の人々がどのような思いでこの峠を越えたか、そして奥沢の街並みが眼に入ったときの感激はいかばかりであったか……』

（博物館メールマガジン）より

赤井川村史には、小樽峠の歌があります。曲はちなみに「秋田おはら節」だそうです。

『 頃は六月末のかた 小樽奥沢後に見て幾十万の国たみが 命と頼む水源地の
ぼり 登りて見晴らしの 右に見えるは天狗山 左にそびえる余市岳 緑いろ濃
く 水清く 路の難所は青獅子で 安達牧場につきぬけり』

（赤井川村史）

この峠を目指す皆様、静かな山の中で思いをめぐらすことも一興かとおもいます。小樽峠は私の裏山の一つです。峠は、豊富な資源や多彩な草木が季節ごとに満ち溢れています。是非一度、お立ち寄りください。

参考

『赤井川史』『天神町史』『小樽市史』『ラショロ場所をめぐる人々』『博物館メールマガジン』
『遼山地学会』『堺家阿学工業社史』その他



ボラレンの活動色々



自然観察会(四季)
 野幌森林公園
 恵庭公園
 北広島レクの森
 芸術の森周辺
 西岡水源地
 三角山・円山等



対雁小学校4年生総合学習

2010.9.9

学校支援



セイヨウオオマルハナバチ防除(4月末)



野幌森林公園 オオハンゴンソウ防除(7月)



キノコ研修会(9月)



北海道ボランティア・レンジャー育成研修会



アポイ岳～高山植物園場の笹刈



鶴川～河口干潟の草刈



野幌森林公園～清掃活動



富良野研修会(H21)



アポイ・様似研修会(H23)



北大雨竜研究林研修会(H24)



富良野 東大北海道演習林研修会(H23)



小樽支部観察会



オホーツク支部研修会(H23)～知床



胆振地区 ウトナイ湖畔研修会(H27)

自然公園とのかかわり方を考える

オホーツク支部 法師人春輝

我々ボラレンと身近な関係にある国立公園は、全国に30ヶ所あると言われております。パークレンジャーの常設されているところが大半だと思いますが、北海道の国立公園は少なからず、我々も何らかの形でお手伝いする機会が少なくないと思います。中でも、私の住むオホーツク管内には知床国立公園があり、自然体験のフィールドとしてはもってこいの地域であります。

その知床国立公園が世界自然遺産に登録されてから10年が経過しました。私が始めて知床を訪ねたのは、今から45年程前、ちょうど加藤登紀子の「知床旅情」が空前の大ヒットをしていた頃です。宇登呂の町は、大勢のカニ族や観光客で一際賑わっていたことが今でも思い出されま

す。その後、知床には、家族や友人達と登山やキャンプ、冬の歩くスキーなど夏冬を問わず何度も出かけ自然の素晴らしさを共有して来ました。今は民間のネイチャーガイドや施設も完備し、あらゆる自然体験が簡単に出来ます。

一方当時は、知床大橋、知床五湖はある意味往来自由で勿論、五湖の遊歩道は自由に散策が可能であり、レクチャー受講や認定ガイド同伴でないと立入が出来ないというような制限は一切なく、自己責任で自然を堪能できる場所でした。

知床は、北海道観光の拠点となり、国内外より大勢の観光客が押し寄せ、更に、世界自然遺産の登録は知床ブームの再来を呼び起こしました。団体客によるツアーや自然体験ツアーは今でも定番です。知床国立公園は、日本におけるナショナルトラストの先駆的な役割を担った「知床100平方メートル運動」が余りにも有名ですが、今ではそういった歴史を経て国や民間による盤石な管理運営体制が出来ており、世界に誇り得る貴重な財産となりました。

しかし、今迄、知床をこよなく愛してきた私としては、時代の流れと共に堅確な管理体制に変わった知床に何か違和感を覚えるのです。それは余りにも制約が多いことです。ヒグマの生息地である危険はあるもののせめてもう少し、もっと自由楽しめるエリアを造れないものか、またそういった国立公園や自然公園が日本に、或いは北海道にあっても良いのではないかとということです。

というのも2015年の夏、フィンランドのヌークシオ国立公園に行ってみてからのことでした。ヌークシオ国立公園は、ヘルシンキ中央駅からVRの列車とバスを乗り継いで北上すること約1時間30分、針葉樹や白樺などの広葉樹に囲まれ、湖沼が点在する公園です。フィンランドは文字通り「森と湖の国」と言われておりますが、その代表格を表す国立公園の一つであると思

います。

ここの面積は4,500haで、知床の1割強程の規模。高山こそはありませんが、湖沼が点在している様は知床五湖、羅臼湖の風景を彷彿とさせます。



フィンランドの国土面積は33万8,000km²で日本とほぼ同じ、人口はと言えば、約540万人でこれは、北海道の人口とほぼ同じです。日本とほぼ同じ面積の中に北海道の人口しかいないのです。

その中で、国立公園は39ヶ所あるといいます。日本は30ヶ所で、それを大きく上回っており、人口密度と国立公園の数から比較しても自然環境への負荷は、日本とは比べ物にならない程低いということも解りました。これだけ自然に恵まれている国も珍しいのではないかと思います。

それにしても行って見て感心したのは、マナーが実に守られており、遊歩道には全くといって良い程ゴミがないこと。来園者が森を自由に利用し、キャンプ地では焚火が自由に出来ます。近くには沢山の薪が詰め込まれた薪小屋まで完備されており、斧まで置いてあるのです。

ここには勿論、売店などはありません。森の中には、ブルーベリーがそこかしこに生えており、来園者は籠を手に森の中に分け入って、ブルーベリー狩りを楽しんでいます。自分達の資産として森の恵みを共有しているのです。



赤コース遊歩道を歩く親子

帰りのバスにはブルーベリーやキノコを沢山籠に入れ持ち帰る人、談笑している人、家族連れや若物達は誰一人として疲れ切っていない、町から来てリフレッシュして帰る人々で賑わっていました。自然を満喫し、充実感に溢れた姿が非常に印象的でした。観光客だけでなく地元の人にも自然の恵みを享受させる、自己責任の範囲で自然を大いに利用ができる国立公園。その寛容さに国民性の違いを感じました。

つまり、制限や規制の中で自然を守るのではなく、自然は自分達に全ての恵みを享受してくれる宝物であるという認識を持たせる、それを次世代の子供達に継承していく、自然は国民皆の財産として守るという姿勢が垣間見えます。この国はそれが昔から伝わって来ているのだと実感し



ブルーベリー狩りをする家族

ました。国民性と環境負荷の違いこそありますが、我々、ボラレンとしてもこれからの子供達へ自然保護思想をどのように啓蒙していくのか、ターニング・ポイントに差し掛かったのではないのでしょうか。

ボラレン30周年の節目に当たり未来永劫どのようにして自然に向き合うか、どのような橋渡し役を担うべきか自問自答し極北の森を後にしました。

ボラレンと絵本の読み聞かせ

札幌市 菅美紀子

早いもので、私がボラレンに入って8年にもなっていました。驚きです。30周年記念号に原稿の執筆依頼がきてびっくり。何を書いたらいいのか悩みに悩み、なんとかボラレンより長く続けている読み聞かせの活動について書いてみようと思い立ちました。

私の住んでいる所のすぐ近くに山の手図書館があります。ここに引っ越して来てすぐに知り合いから読み聞かせのボランティアサークルに誘われました。すっかり気に入って楽しく活動していました。数年後、今度はバードウォッチングのサークルに誘われました。こちらもとても面白くはまりました。遠くには行けないので近くの野山を歩き回って野幌森林公園にも足を運ぶようになり、ここで浜本真琴さんと出会い育成研修会のことを聞いてボラレンにも入ってしまいました。

自然解説員としての歩みはカメ並ですが、この頃から子供たちにかがく絵本やそれに近い絵本を読むことが多くなりました。そのいくつかを紹介してみようと思います。

植物では「つくし」これは掘り起こして実物を見せ、つくしとすぎなが同じ株から出ていることを見てもらいました。「いちご」、「すみれとあり」スミレの種がアリに運ばれるのがどうしてかよくわかります。「おおぼこ」葉っぱと実で遊びました。「バナナのはなし」、「マングローブ」、「のげしとおひさま」、「れんこん」、「たねのずかん」、「ぼくはたね」、「たねのさくせん」など種は実と一緒に見せました。とても喜びます。4月末には「さくら」、秋には「どんぐり」、「どんぐりかいぎ」、冬には「ふゆめがっしょうだん」など。ドングリも木の枝の冬芽も見せるとみんな持って帰りたいと言います。

昆虫も人気です。「トンボしょうねん」虫取りが好きになりそうな絵本です。「ぼくだんごむし」、「わたしくわがた」、「むしたちのさくせん」、「きゃべつばたけのびよこり」モンシロチョウのことが描いてあります。「こおいむしのこそだて」、「ななほしてんとう」いろいろなテントウムシが描かれています。「かまきりのちょん」カマキリは北海道にいないことも話します。「むしのあいうえお」この絵本は虫の生態が楽しく紹介してあります。「ほたる」など。

生き物では「すずめ」、「すずめくんどどこでごはんたべるの」、「しまふくろうのみずうみ」、「あざらしのはる」、「うらやまのえぞりす」、「かめのひなたぼっこ」、「そらいろのけもの」これはモモンガとテンの攻防のはなしです。

自然科学的な絵本では「森のいのち」、「しもぼしら」、「みずのたび」、「しずくのぼうけん」など、子どもにも私にもいろいろなことを教えてくれます。少し前ボラレンで雪虫が話題になって絵本でないか探したら写真絵本「雪虫」がありました。残念なことに読み聞かせ会に来る子供たち（最近はお母さんに連れられて来る就学前の子どもが多い）には少し難しいものでした。でも私の気に入りの絵本になりました。

とてもささやかですがボラレンでの活動は、私のいろいろな場面でいきているように感じます。

柿の歳時記

札幌市 三輪 礼二郎

里古りて柿の木もたぬ家もなし 芭蕉

本州では、秋になるといたる所に、枝もたわわに実った柿の木を見ることができ
る。晩秋の家々の軒は、柿簾でにぎわっている。掲句に詠われているのは日本の、
殊に農山村の原風景である。

柿はカキノキ科に属する暖帯性の落葉高木で、奈良時代以後に中国から導入され
たといわれている。万葉集には、栗、梨、梅、桃、棗などの果樹が詠まれているが、
柿の歌は一つもない。

柿には、いうまでもなく、甘柿と渋柿ある。甘柿は日本で作出されたもので、そ
の栽培は、鎌倉時代に始まったことが知られている。実の色が青から黄に変わるこ
ろ、渋味の成分であるタンニンが不溶化されて、甘柿となるのである。

柿の木は日本全土に広まり、芭蕉の時代には、「柿の木もたぬ家もなし」という状
態になっていた。柿は里人の生活を支えるものとして、大切にされ親しまれていた
に違いない。そのことは、昔話の「猿蟹合戦」や、「桃栗三年柿八年」「梅根性に柿
根生」などという俚諺からも窺い知ることができる。梅根性は、梅を干しても酸っ
ぱさが抜けにくいことから、頑固な性質を表し、柿根性は、渋柿を干すと甘くなるこ
とから、融通のきく性質を表している。

芭蕉の「柿の木」を他の木に変えることはできない。柿は、実用性において際立
った存在であった。それは昭和に至るまで変わることはなかった。里人にとって、
何故それほどまでに大切なものだったのか、俳句を通してみたい。

まず、先述の俚諺に出てきた桃、栗、柿、梅に関する季語（傍題を含む）の数を
比較してみよう。「合本俳句歳時記」（角川学芸出版）によると桃 7、栗 12、柿 29、
梅 51 であった。ちなみに桜は 82 であった。梅や桜が花鳥諷詠の主題であることを
考えると、その対象とはならない柿の季語の多さは突出している。それは取りも直
さず、人の暮らしがいかに柿と密着していたかを示している。

柿植ゑて子らに八年先のこと 克巳

柿は果物としてだけではなく、家具材や器具材としても重用される。また、葉に
はビタミンCがレモンの十倍以上も含まれ、柿の葉酢や柿の葉茶に利用されている。
さらに、蒂（へた）や根も漢方薬として用いられている。

効用の多い柿の木を、春のある日植えた。そのとき、子供らにどんなことを話し
たのか。柿のことか、自分のことか、あるいは子供の事か、様々に想像される。

しんしんと月の夜空へ柿若葉 汀女

昨年五月に出雲に旅行したとき、果樹園に、萌黄色の柔らかな、それでいて艶や

かな柿若葉を見た。子供のころ何度も見ていた筈であるが、この齢になって初めて、「あゝ」と思った。

柿の花こぼれて久し石の上 虚子

柿は五月下旬から六月上旬にかけて、一つの木に淡黄色の雌花と雄花を開く。雄花は役目を終えると落ちる。また、受粉しなかった雌花も落ちるので、夥しい落花をみることがある。柿の花の句に、落花を詠んだものが多いのはそのためであろう。

よろよろと棹がのぼりて柿挟む 虚子

柿の実を竹棹を利用して取る。棹の先を矢筈形に切り、その部分に実のついた小枝を挟んで折り取るのである。甘柿は子供のころの最高のおやつであり、どこの家の庭にも植えてあった。重い竹棹をよろよろ伸ばして取ったものである。現在販売されている柿の大半は、渋柿のタンニンをアルコールや二酸化炭素(ドライアイス)を用いて、人為的に不溶化したものである。

新渋の一壺ゆたかに山盧かな 蛇笏

柿の旁は上澄みを意味し、柿は、その液から渋を取ったことに由来する。

母が渋柿の未熟な実を搗いて細かく砕き、これを甕に詰めて発酵させ、柿渋を作っていたのを思い出す。竹を編んだ笊や籠などに紙を張り、その上から柿渋を塗ると、丈夫な撥水作用、防腐作用のある容器になるのである。

干柿の緞帳山に対しけり 羽公

渋柿が熟して柔らかくなる(渋が抜ける)前に収穫し、一家総出の夜なべで皮を剥き、吊し柿を作った。柿簾という季語があるが、簾の如く、緞帳の如く吊るされた柿は、まさに秋の里の風物詩である。

窯変に似たる彩あり柿紅葉 暮石

畑中は柿一色の落葉かな 志朗

観音の空の青さや木守柿 恵美子

秋が深まってくると、柿の葉も色づいてくる。しかし、一色に染まることはない。赤、黄、緑の混じりあったモザイク模様となるのだ。それが冬になると一斉に落葉する。枝先には赤い熟柿がぶら下がっている。霜に当たると一層甘くなる。しかし、里人はそれをすべて取ったりはしない。鳥のため、あるいは木のためにいくつか残しておく。これが木守柿である。小春日の青空に赤い木守柿が映える。

柿の歳時記を繙いてみると、里人と柿の関係がよくわかる。里人にとって、柿の木は長く連れ添った伴侶のようだ。国や都道府県には、それぞれに指定された樹木がある。それを日本(本州)の家に適用すると、柿が最もふさわしいと私は思う。

北海道ボランティア・レンジャー協議会設立30周年記念事業

梅沢 俊 講演会

日にち：平成27年10月24日

場所：北海道開拓の村 ビジターセンター講堂

テーマ：近年認識された北海道における新種、新産の植物と高山植物の生存戦略

一般財団法人 北海道歴史文化財団の後援をいただき、梅沢さんの講演会を開催することができました。ボラレンと一般の方を合わせ182人の参加がありました。

1 はじめに

今日の講演は他の方をお願いしようと思った。自信がなかった。11月にもう一つ講演があったがそちらは他の人をお願いした。

ここ数年、夏にヒマラヤに出かけている。青いケシが何種類もあり、歩けるうちに映像に残しておきたいと思っている。去年はアンナプルナのマチャブチャレで青いケシを見つけた。今年はガネッシュヒマールに行こうと思っていたが、4月にネパールで大地震があり、ブータンに行くことにした。ブータンの東のはずれ、インドとの国境近くに花の色がワインレッドの青いケシがある。

初日は標高4000m付近でキャンプ。翌日の途中から記憶がなく3日目に昏睡状態となり、人力で担ぎ下ろしてもらい、ブータンの首都ティンプーの病院に入った。CTスキャンで調べると硬膜下血腫だった。頭に穴をあけ血を抜いたが、その病院は最近になって漸くこの手術が出来るようになったと言っていた。倒れてから4日目の手術だった。ふつうは後遺症があるが、今日、何かおかしいことを言ったら後遺症だと思ってください。8月に手術が終わり様子を見たが、札幌に戻りもう一度入院し血を抜いた。

ボラレンには、今回の講演を何度も頼まれていたので今日ここにいる。ここまで言うと思わせられているかもしれないが、実は思わせてるんですよ。今日のこの会場にはスライド映写機は無い。なぜ無いかというと使う人がいない。相変わらずフィルム。映写機はボラレンが持ってきてくれた。スライド係は野生生物研究所の五十嵐博さん。

2 北海道における新種の植物

大雪山高根ヶ原のアザミ。古い図鑑ではミヤマサワアザミとなっていてエゾノサワアザミの高山型とされていたが、ずっとおかしいと思っていた。国立科学博物館の門田裕一さんはチシマアザミの高山型と考えていた。葉が櫛歯状に深裂している。北日高、戸蔭別岳のチシマアザミの高山型は、背丈が低く葉の切込みがない。大雪山銀泉台第1花園ではミヤマサワアザミとチシマアザミが混生している。結局エゾノミヤマアザミという新種で、門田さんは私を学名の共著者として発表してくれた。

無意根山大蛇ヶ原に正体不明のアザミがある。葉は櫛歯状に切れて頭花は下を向く。昔はこれをエゾノサワアザミとしていたが、仮称エゾノキレハアザミで分布は広い。

コバナアザミは北海道で一番ポピュラーなアザミで、がく片に腺体(白い筋)がある。カムイアザミはマルハヒレアザミと呼ばれていたが総苞片が反り返りぎみ。アッケシアザミ、テシオアザミ、チカブミアザミなど門田さんは地名が好き。リシリアザミは15~20年前に私が見つけた。

アザミは奥が深い。アザミが国花となっている国がある。13世紀ごろ、スコットランドはノルウェーの来襲を受け、城の周りを包囲されてしまった。夜襲をかけようと城に近づいたノルウェーの兵士達ところが、城の周りには棘だらけのアザミが生い茂り、兵隊達を酷く傷つけたため、痛さに思わず声を上げ、その声でスコットランド兵達も飛び起きて敵を撃退する事に成功した。

3 北海道のレイジンソウ

北海道はレイジンソウのホットスポット。基本はエゾノレイジンソウ、マシケレイジンソウは開出毛がある。ソウヤレイジンソウは屈毛があり子房に毛がある。がく片に色があるのが、コンブレイジンソウ、ニセコレイジンソウ、カムイレイジンソウ、オシマレイジンソウ。

4 新産の植物

カラフトアツモリソウは元々あったのか植えたのか問題になっている。私は植えたものだと思っている。その証拠に、ここ3年ほど花をつけていない。衰退していく途中だろう。モウコガマはあちこち出たが最近すべて消えた。環境が合わなかった。オオアカバナが札幌西区の河原に出た。3面張りの河床なので元々生えていたと考えるのは無理。水鳥が散布しているかも。消えていくものがある一方リュウキンカは残るかもしれない。今後の楽しみ。

5 高山植物の生存戦略

ネパールの国花はシャクナゲ。真っ赤な花だが、実物を見るとイメージが変わる。私の胸回りぐらいの直径で、10m以上の大木。茎がなく地面にへばりつくもの、標本にすると台紙を破ってしまいそうなアザミ。枯葉がクッションになって毎年積み重なり地下茎を守る植物。矮小化したもの。地上茎がほとんどなくなってしまったものなど生残りをかけた様々な戦略がある。雨が多い東ヒマラヤでは下向きに咲く花が多い。

ワタゲで花序や茎を守るワタゲトウヒレン。花はきれいではない。暖かいことが大事。綿毛の上部に小さな穴があり虫が中に入る。包葉で花序を包み込むボンボリトウヒレンなど色々な型のトウヒレンがある。温室植物の代表格、セイタカダイオウは人間の背丈ほどの大きさだが、晴れた日で外気温と植物内部の温度差は15度くらいある。

ところで、ブータンで大手術をして帰ってきたが、どのくらいお金がかかったと思いますか。実は、あの国は教育費と医療費はタダなんです。このまま順調に回復したら来年もう一度ブータンに行ってみたいと思っている。

6 質疑応答

Q 大雪でトラキチランを探しているが見つけれない。見つけ方のヒントを伝授していただけると嬉しい。

A トラキチランは針葉樹林の下草のあまりないところに出る。大雪湖があつて銀泉台に向かうトンネルの上あたりで何度か見ている。掘り取ってきても消えることを覚えておいていただいた上で教えるが、そのあたりを探せば見つかるかも。もし見つかったらよろしく言っておいてください。

梅沢節全開の2時間でした。

報告： 五十嵐一夫

忘年会で聞いてみました

2015年12月5日

札幌市北区・鳥太郎にて



忘年会参加者に「ボラレンに一言」と題して聞いてみました。
「食べて一言」「飲んで一言」「酔って一言」のいろいろです。

- ★ ボラレンに参加して面白かったので、年数が古くなっただけでまだ先輩たちがいるし自然の中を歩くのは楽しいので死ぬまでやりますから！！！！(I)
(体幹年齢は53歳だそうです、羨ましい・広報部)
- ★ やめるまでやります。(M)
(強い決意のおことばでした・広報部)
- ★ もっと一般の人にもボラレンの事を広めたい。知らない人が多いのもったいないと思います。自然ふれあい交流館の松井さんのように広報活動にメディアを利用出来たらいいですね。(S)
(自然ふれあい交流館との共催観察会はTVで知ったとのことです・広報部)
- ★ 観察会参加者の動向を見ながら試行錯誤しながら観察会を考えていきたいです。ボラレンさんと二人三脚で同じ方向へ目標を持って歩いて時には走って行きたいです。(O)
- ★ 一年に一度こうして楽しい親睦会を持てる素晴らしい会はそうないよね。(M)
(そうですね、いつも支えて下さっている方に感謝です・広報部)



★ ボラレンの窓口を広く開けて他の活動をしている人たちと情報を共有していけるとい
いと思う。メディアで色々情報は得られるが、実際に体
験することは大切な事ですよ (S)

★ 楽しくボラレンの活動をしています (M)
(楽しい活動をぜひ多くの人と共有したいです・広報部)



★ とにかく楽しい会ですね。野幌の森は好きで何十年と歩
いているが、ボラレンに入って人との出会いが楽しいですよ、人に教わるのも楽しい
です。出会う植物を図鑑で調べるのも楽しくて時間が惜しくなってきました。(A)
(アリヤツチハンミョウなど詳しく知りたいと好奇心に溢れ、今までこの楽しさに気付
くのが遅かったとおっしゃる一言は同感です・広報部)

★ 昆虫が好きで植物は食草としてしか見ていなかったが学校の先輩である佐藤孝夫さん
の本に刺激されて興味を持ち又ボラレンの人たちと野幌の森で出会いそのうちに自分
もやってみたいと思うようになった。これからよろしく。出来ることをします。(F)
(新会員からのうれしい一言です・広報部)

★ ボラレンに入会した時は何も知らない新一年生でしたがそれから高校卒業の年数12
年目になりました。長続きしているのは人との出会いと知らないことを知る楽しさで
す。これもボラレンの先輩たちに感謝です。(U)

★ 30年近く在籍しているが初めと変わらずに関わってきた。長いとも思っておりませ
ん。最近は何となく顔馴染みのメンバーで動いている感がしている。30年記念に創
立時のメンバーをお訪ねする機会などあっても良いと思う。(N)
(これからもよろしくご指導お願いいたします・広報部)

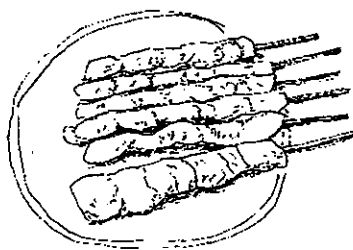
★ 会として一般参加者、ボラレン会員を問わず色々な人の意見を聞いて行って欲しい。
聞き役も大切なことと思う。(O)

★ 会員の中でのレベルの差を感じる。その中でどうバランスを取っていくかである。
「エゾマツ」については自分として勉強できる冊子として楽しみにしている。写真を
カラーにして欲しい。色があればもっと楽しめると思う。(C)
(そうですね。原稿はカラーでいただいていますのに、予算が無くてすいません。・広
報部)

★ 地方の研修会にはよく参加しながら10年ほどお祭り男として在籍している。ゴミ拾
いなどに参加しているが植物、昆虫などは覚えられない。誘われて入会したが自分は
楽しく思っている。育成研修会修了した全員に『この会に入れば楽しいよ』と伝えた

い。「エゾマツ」に家庭菜園コーナーがあったらいいのに。成功談。失敗談。害虫など。身近な野菜についての情報発信も面白い、ためになる。(A)
(ぜひ、発信をお願いいたします。面白いページができそうです・広報部)

- ★ 在籍3年目。活発な会だと思う。自分が教えて欲しいことだらけ。育成研修会の3日間は出られない人が多いと思う。2日間にはならないか？(I)
- ★ 会のレベルは高い方が良くに決まっているが気軽に参加出来る会であってもよいのでは。一般参加者もボラレン会員もふらっと参加出来れば良いと思う。(C)
- ★ 故・川端功治さんのお言葉『知る事は楽しいよ。でも愛でることはもっと楽しいよ。今日はツタウルシの紅葉が美しいよ。忘れずに』思い出しながらボラレンに参加しています。(K)



カット・熊野美子
聞き手・広報部

ボラレンの研修会でお世話になっているアポイ岳ジオパークビジターセンターの学芸員、田中正人さんからのお知らせです。

アポイ岳フォーラム

花の山”アポイ“の保全再生 ～アポイから世界へ発信～

日時 2016年2月27日(土) 13:30

会場 道新ホール(札幌市中央区西3)

基調講演 植物写真家 いがりまさし氏

(音楽家でもありますので、ライブ演奏も楽しめます!)

入場無料

共催 様似町・アポイ岳ファンクラブ / 北海道新聞社

後援 北海道高山植物保護ネット

問い合わせ 様似町商工観光課アポイ保全係

電話 0146-36-2020

Fax 0146-36-2662

同時に世界ジオパーク展や写真展が開催されます。

いい案内人になろう

春日 順雄

はじめに

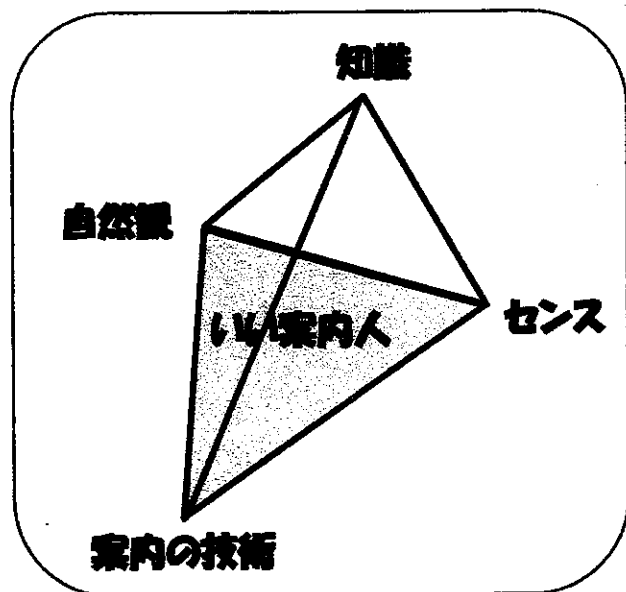
この小編は、例年、育成研修会のまとめの講義に使用してきたものです。自然の案内人として巣立つ人たちへのささやかな指針になればと書き上げたものです。これとは思う役立ちそうなことを収集し再構成しました。極めて完成度の低いものと自覚しています。しかし、この小編は、日々の実践の導きの書です。私にとっては「オリジナルな観察会案内のバイブル」です。

本論

第1章 知識を磨き、案内の技術を磨き、自然観を磨き、センスを磨こう

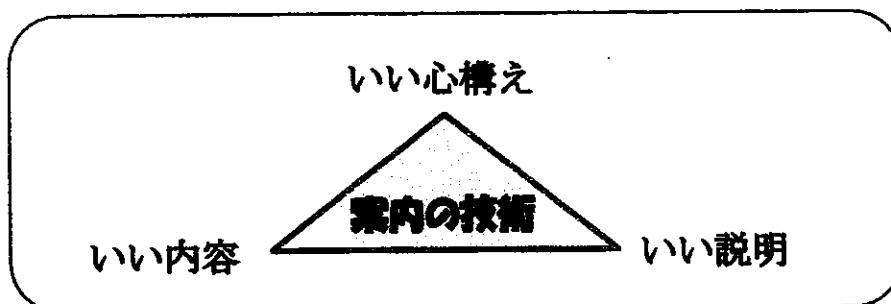
知識・案内の技術・自然観・センスを正四面体の頂点に配してみました。

「いい案内人」は、一つだけの要素で迫るのではなく、構造的な迫り方なのです。



◆さらに、正四面体の四つの面の三角形をもとに考えを進めていきます。

第2章 案内の技術 (いい顔・いい声・いい動き)



「案内の技術」は、いい心構え、いい内容、いい説明の三つの要素の関わりで高められ、磨かれます。

1, いい心構え

(1) 自然解説は、サービス業

*自分が楽しくなければ、参加者は楽しくない。

*参加者の立場で考える。

*ホスピタリティを発揮しよう。(気配り、感謝する気持ち、信頼される姿勢)

(2) 「知ったかぶり」をしない。正直に分からないといえる勇氣。

奥の深い自然界だから、分からないことがいっぱいあって当たり前。

(3) 参加者全員に平等に対応する。

(4) 参加者の良さを生かす

2, いい内容 (観察会が楽しくなるポイント「植物を例に」)

(1) 植物名にはこだわらないが、大事にする

知識や情報は言葉を通して人に伝えます。植物名には花の色や形、葉の形など、その植物に関わる情報をすべて含んでいます。名前だけ覚えればいいというのは、いけないが、名前に含まれる内容を大事にしましょう。

(2) 適者生存の果ての姿

静かなたたずまいの植物ですが、適者生存の進化の果ての姿です。たくましさイッパイです。飾りオシベをもつツユクサ。花糸が集まってブラシ状で虫を誘うヒトリシズカ。花粉媒介の労を担った昆虫を閉じ込め、恩を仇で返すマムシグサ。いい内容がイッパイです。

(3) 人と自然との関わりを大事に

人と植物の関わりの話は、参加者の興味や関心を引きつけます。

・薬草として使う話 ゲンノショウコやキハダなど。

・山菜として利用した話 観察会では食べられる植物の話は避けるよりも、正しい採取の仕方を話題にするといい。 タラノメやフキの採取の仕方など。

・子どもの頃の自然体験など。

・害虫から身を守る ヨモギをいぶした話やハエドクソウの話など。

(4) 文化のふるさととしての植物

わびやさび、無常観などは、日本の自然風土に根ざして生まれたといわれます。春は桜と日本人、秋はハラハラと散りゆく風情と無常観など。

3, いい説明

(1) いい顔、いい声、いい動き

(明るい顔で・明るい言葉調子で・参加者に配慮する)

(2) 五感を働かせる

五感を働かせる場面を作りましょう。

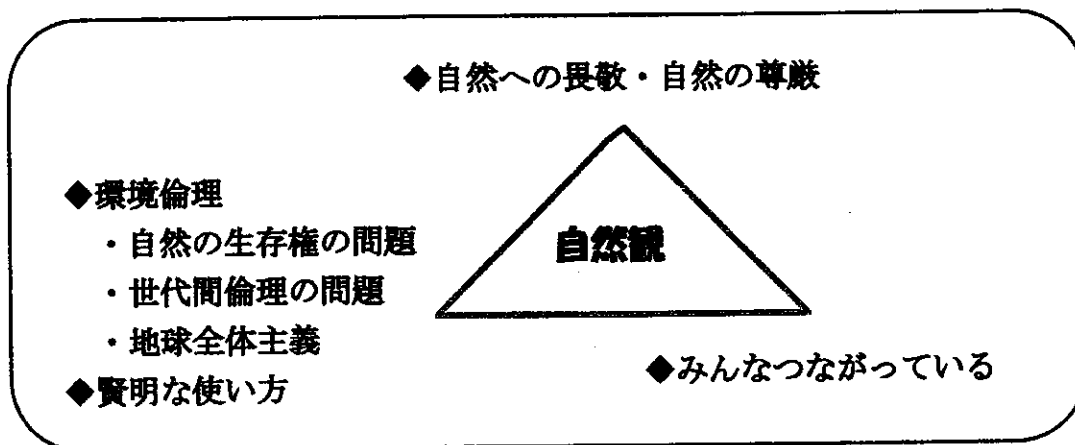
「茎をさわってごらん。」「四角だ、三角だ、ツルツルだ、毛がある。」

「葉の付き方をみてごらん。」「向かい合っついでいる、互い違いについている。」など、参加者を動かしましょう。

4、言葉を補完するもの（視覚に働きかけるものがあるといい）

図鑑・写真・標本・画用紙とマジックなどで書いて説明などの具体性

第3章 自然観



1、自然への畏敬・自然の尊厳

(1) 人間は自然の前に“ひざまずく・感謝する”ことを忘れ始めた

地球の自然の中に生を受けた人間
地球の自然の中で進化して今日がある人間
その過程の中で自然からどれほどの恩恵を受けてきたことか
人間は自然なくして生きていられない

自然科学の発達によって、様々なことが実現可能になった。しかし、人間は自然の一部です。自然なくして生きて行けません。地球上の生物は、光合成を基幹とする生態系です。野や山を埋め尽くす緑の植物は光合成の大工場群です。科学の力で光合成の仕組みは解明しました。しかし、人間は人工で光合成は出来ません。様々な酵素の働きでなされる光合成の過程は、まさに神様の支配する領域です。科学が発達しても人間は、生きていくための一番大事なところを自然の営みに委ねていくでしょう。

今からそれほど遠くない時期、人々は自然の前に“ひざまずく・感謝する”ということをしていました。雨・風・寒さなどの自然災害にはひざまずき、秋の稔りには感謝するなどをしました。

いくら科学が進歩しても、自然の前に“ひざまずく・感謝する”の謙虚さは大事です。傲慢であってはならないのです。

(2) 宮沢賢治の「狼森と策森、盗森」(おいのもりとざるもり、ぬすともり)

小岩井農場の北に黒い松の森が四つあります。

いちばん南が狼森で、その次が策森、次は黒坂森、はずれは盗森です。

「ここへ畑起こしてもいいか。」

「いいぞお。」森が一斉に答えました。

みんなは、又、叫びました。「ここに家、建ててもいいかあ。」

「ようし。」森はいっぺんに答えました。

みんなは、又、声をそろえてたずねました。「ここで火をたいてもいいかあ。」

「いいぞお。」森はいっぺんに答えました。

みんなは、又、叫びました。「すこし木もらっていいかあ。」

「ようし。」森はいつせいに答えました。

※ここには「森へ伺いをたてる謙虚さ」と「森への感謝」が書かれています。

(3) ルール違反をした人間

昆虫にはかならず天敵がいて、一種類だけが増えすぎたりしないようになっています。自然界は、一種類だけの動物や植物が増えすぎることは許さない。食べたり、食べられたりして自然界は調和を保っている。

人間は自分で自分の天敵を滅ぼしてしまった。都合のよい植物や動物を作り上げた。人間自身が知らないうちにひ弱で野生の鋭敏さを失った家畜のように変化してしまっただ。

人間が便利で快適な生活をする事が出来るようになったのは科学と文明の勝利なのですが、人間はその能力をよく考えて使わないとほかの動物を滅亡し、やがては自分も滅びることになってしまいます。

人間がこんなに発展したのは強い欲望を持ったからでしょう。しかし、あまりに欲望が強すぎるのは、いけないことです。虫やほかの動物も食べるためにほかの生きものを殺しますが、人間の場合は食べる以上のものを殺してしまうことが多いのです。

私たちは、自分たち人間の都合と欲望だけで生活するのではなく、ほかの生きものについても考えて、少し遠慮することも必要でしょう。そして、結局は、その方が美しい昆虫や鳥や獣たちと楽しく暮らせることになるのではないかと思います。

もし、人間が自然と調和して暮らす知恵を本当に身につける事が出来たら、その時こそ、この地上にエデンの園が実現することでしょう。

この地球こそがエデンの園であり、エデンの園は、ここにしかないのです。

(集英社刊『ファール昆虫記7』より引用)

(4) 自然保護について～次の文は理詰めではなく情緒的ですが胸に響きます

その頃の私は、各地で起こる自然破壊にひどく心を痛め、自然破壊にひどく心を痛め、自然保護に並々ならぬ関心を持ちながらも、自然を守るとはいったいどういうことなのか、皆目見当がつかずにいた。

しかし、賢治はそんな私の肩を、ポオンと叩いて言ったのだ。

「あのなっす、いっとう大切なことは、自然が私たちが養ってくれている、ということなのす。私たちが耕して農業をしたり家を建てている大地は、自然からの借り物であんすから、木や草や、他の生き物たちとも、一緒に使わねば、わがねのす。それから木は、森からの戴き物であんす。森の許しを請うて、必要な分だけ戴いてくるものであって、決してわが物顔に伐り倒すもではなおのす。」

もちろん私には、賢治が実際にどんな話し方をしていたのか、まったく分からないのだが、とにかくそんなふうに言われたような気がした。

(『それぞれの賢治』 世界文化社刊 澤口まゆみ文 から引用)

2. 賢明な使い方

人は自然の恩恵なくして生きていかれません。恩恵の受けっぱなしでは、自然は破壊してしまいます。その様な状況の中で生まれてきたのが「賢明な使い方 (Wise use)」です。人間優位の考え方です。

(1) ラムサール会議での定義

「賢明な使い方 (Wise use)」は、ラムサール会議において「生態系の自然特性を変化させないような方法で、人間のために湿地を持続的に利用すること」と、定義されています。

(2) 日本自然保護協会 NACS-J (Nature Conservation of Japan)

基本的にコンサーベーションを原則としています。そして、その定義は「自然を常に豊かに保ちながら、その平衡を破ることなく、これを高度に活用し、さらに、そのような豊かな状態のまま、これを次の世代に伝え遺す。」合理的、実用的、明快な定義であり、人間優位の姿勢が明瞭です。

(3) 持続可能な

この言葉は、1987年、国連の「ブルントランド委員会報告書」

Our Common Future 『地球の未来を守るために』によって確立されたということになっています。素晴らしい自然を高度に活用しながら後世に残すこと、再生可能な資源を上手に使い、枯渇型の資源を後世の人たちのためにできるだけ残すことは、現在を生きるわたくしたちの大切な使命です。

また、ハーマン・デイリーは、持続可能な発展のための三つの条件を次のように示している。(以下、『新・環境倫理学のすすめ』P27 から)

A, 土壌、水、森林、魚など再生可能な資源の持続可能な利用速度は、再生速度を超えるものであってはならない。(たとえば魚の場合、残り魚が繁殖することで補充できる程度の速度で捕獲すれば持続可能である)

B, 化石燃料、良質鉱石、[地層に閉じ込められていて循環しない]化石水など、再生不可能な資源の持続可能な利用速度は、再生可能な資源を持続可能なペースで利用することで代用できる限界を超えてはならない(石油使用を例にとると、埋蔵量を使い果たした後も同等量の再生可能エネルギーが入手できるよう、石油使用による利

益の一部を自動的に太陽熱収集器や植林に投資するのが、持続可能な利用の仕方と
いうことになる)

C、汚染物質の持続可能な排出速度は、環境がそうした物質を循環し吸収し無害化でき
る速度を超えるものであってはならない (たとえば、下水を川や湖に流す場合には、
水生生態系が栄養分を吸収できるペースでなければ持続可能とはいえない)

3、環境倫理

環境倫理学「環境問題が深刻化するなかで、倫理学の課題として、人間と自然、環境
の関係における規範、価値基準はいかにあるべきかという課題意識の基に誕生した。」

●加藤尚武「環境倫理学のすすめ」 三つの基本主張

- ・自然の生存権の問題「人間だけでなく、生物の種、生態系、景観などにも生存の権
利があるので、勝手にそれを否定してはならない。」
- ・世代間倫理の問題「現代世代には、未来世代の生存、可能性に対して責任がある。」
- ・地球全体主義「地球の生態系は、開いた宇宙ではなく、閉じた世界である。」

『新・環境倫理学のすすめ』から

環境倫理学の三つの柱、①自然の生存権の問題、②世代間倫理の問題、③地球全体主義
は、どれも説得力を持ったものです。宇宙船地球号は、今ある姿にまで育ってきた歴史
を宿し、ともに生活してきた沢山の生物を宿し、絶妙なバランスの上に成り立っていま
す。いま、宇宙船地球号が危ないは、共通意識として共有しなければならないことであ
りましょう。次の世代に、今ある生物の多様性をはじめとする健康な宇宙船地球号を引
き継いでいきたいものであります。その為の手段の一つとして、枯渇型の資源をできる
だけケチって使う、

再生可能な資源を上手に使うことも大切です。「持続可能な」は、このように、大きな
概念、宇宙船地球号の再生をかけた言葉遣いです。

4、「沈黙の春」 レイチェル・カーソン著 自然保護活動のバイブル

「レイチェル・カーソンが問いかけたもの」 原 強 著 かもがわ出版より引用

DDTなどの農薬、殺虫剤が止めどなく使用されたとき、自然の生態系はどうなるのか。
そこに生きる生物はどうなるのか。さらには、人間に対する影響はないかを問いかけたも
の。

<これを構成する四つの柱>

●おそるべき力

この地球に生物が誕生して以来、生命と環境という二つのものが互いに力を及
ぼし合いながら生命の歴史を織りなしてきた。地球が誕生してから過ぎ去った
時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなもの
に過ぎない。だが、20世紀というわずかの間に、人間という一族が恐るべき
力を手に入れて、自然を変えようとしている。

★生物の連鎖が毒の連鎖に変わる 食物連鎖・生物濃縮

★最後は人間 毒の連鎖の最後は人間

★別の道へ

「私たちの住んでいる地球は、人間だけのものではない。」の認識のもとに、かけがいのない生命と環境を守るための、あらゆる可能性と探求への努力を惜しんではならない。

5、みんなつながっている

●森の世界

森には
何一つ無駄がない
植物も動物も微生物も
みんなつらなっている
一生懸命生きている

一種の生き物が森を支配することの
ないように
神の定めた
調和の世界だ

森には
美もあり 愛もある
はげしい闘いもある
だが
ウソがない

「どろ亀さん、最後のはなし」
から引用
どろ亀さん=高橋 延清

現在の生物界は、適者生存という進化の果てに到達した姿です。地球上の大量絶滅など過酷な試練を生き抜いた、言い換えると、多くの偶然によって命をつないできた姿です。

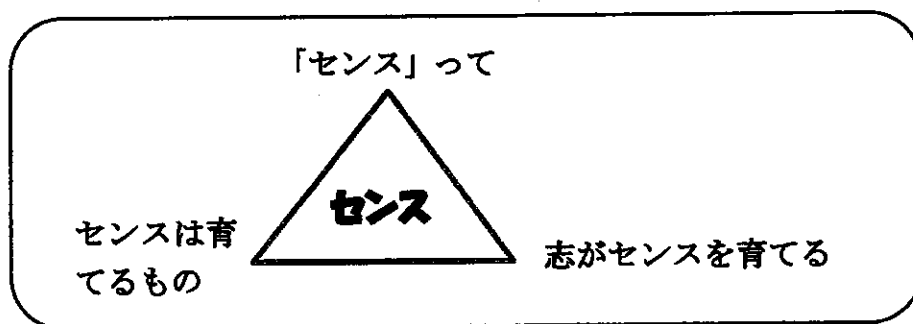
穏やかな自然界のように見えますが、熾烈な生存競争が続いています。現在の生物界は、適者生存のバランスの上に成り立っています。

左掲の詩のように「植物も動物も微生物も みんなつらなっている 一生懸命生きている」世界です。

進化の果てに到達した“みんなつながっている”という自然理解は、自然観の大事な視点です。



第4章 センス（感性）＝感受性



1、「センス」って

センス＝感受性です。五感をとおして外界を認識することです。「見れども見えず。聞けども聞こえず。」というように五感は機能しないことがあります。センスは、集中力・意欲・問題意識・知識・体験などとセットで機能します。

2、「センス」は、育てるもの

(1) センスが育つ過程

五感（感受性）で刺激を受け取る（受容）→知識や経験と照らし合わせて受け取る（理解）→持っている知識や体験と統合し、新しい知識や体験の幅を広げる。（統合）→センス（感受性）が豊になる。受容・理解・統合の繰り返しでセンスは育っていきます。

(2) センスを育てる

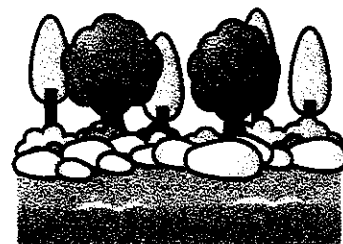
- ・問題意識や課題意識があるとセンスは育ちます
- ・自分の持っている知識や体験との対話によってセンスは育ちます
- ・他者のセンスを学ぶことによってセンスは育ちます。

3、志がセンスを育てる

- ・自分を高めたいという向上心、プラス指向がセンスを育てます。
- ・「いい案内人になりたい」という気持ちが、自然へのセンスを育てます。
- ・すべての志がセンスを育てます。絵のセンス、書のセンス、運動能力のセンスなど、上手になりたいという志があるとセンスアップします。

終わりに

「自然にひざまずく、感謝する」を新しく加えました。「みんなつながっている」を補完しました。最近、「植物の知恵など」の言葉が多いですが、「植物が現在あるのは」、適者生存という進化の果ての姿、熾烈な競争は今も続いています。ガラスの器のような、壊れやすいバランスの上にあるという考えで書きました。センスは、全面的に書き換えました。センスは育てるものです。「志を持つことがセンスを育てます。」の立場で書きました。本小編が皆様に役立ち、ご利用されることを祈念します。



30周年記念事業あれこれ

30周年実行委員会 五十嵐 一夫

「梅沢さん、大丈夫かなあー」 私には何のことか、ちんぷんかんぷん。「講演会聞きに来ない?」とアポイ岳ファンクラブの田中さんに電話したときの一言。事の顛末は別記事のとおり、ご本人の口から詳しく説明がありました。

30周年記念事業を企画する段階で梅沢さんの講演会はぜひ実現したいという思いが強かった。20周年のときには、五十嵐恒夫さんにキノコの話、大橋弘一さんに鳥の話しをしていただいたが あのと時から10年が過ぎた。万年青年と思っていた梅沢さんも齢70を超えていて今しかないと思いつてもないままに講演依頼の突撃をかけた。

平成26年11月の道新に「幻の花 見つけた ～60年間報告なし メコノプシス・テイラーイ～」の見出しで記事が掲載された翌日、高山植物の市民フォーラムで梅沢さんの講演があり、この現場に突撃を敢行したのだが、この講演がまた興味深く面白いものでした。

幻のケシを見つけた場所がネパールのマチャブチャレ(魚の尾)という6000メートル級の山の中腹。マチャブチャレはアンナプルナトレッキングルートの途中にあり、英語名もフィッシュテイル。サンマの尻尾のような二つのピークがそびえている。地元では信仰の対象で神聖な山。初登頂を目指した英国隊は頂上の50メートル手前で地元との約束を守り登頂しなかった。それ以降登山は禁止されている。なので、登山ではなく、中腹とはいえ梅沢さんは幻のケシの発見まで、調整が大変だったような気がする。私はこの山にカメラを向け、ネパールのぼあちゃんに「ドンフォ、ドンフォ」(do not photo)と怒られた。結局ちゃっかりとフィルムに収めてきましたけど。

「僕なんかでいいのかなあ、でも前向きに検討します」が最初の返事。その後、電話・手紙での波状攻撃を切れ目なくしつこく展開し了解を取り付けた。講演会当日は、申込みせずに来た方たちを、あたかも飛行機のキャンセル待ちのような状態で対応し10人ほどを滑り込ませた。個人的には、結果オーライで成功したと思いつている。

ところで、記念事業のもう一つは、自然観察ハンドブックの続編を編集すること。20周年で刊行したハンドブックは、植物と鳥を中心に身近な近似種の見分け方と、森の仕組みと自然観察の基礎について38ページにわたり解説した。今回のハンドブックは植物と鳥のほか、観察会で話題になることが多い虫こぶについても解説を加え60ページを超えてしまった。これでもずいぶんと掲載する候補を削ったつもりだったが、それだけ我々ボラレンの知識の蓄積が膨大なものとなっていることにうれしく思う。

20周年のハンドブックには携わらなかったが、今回編集作業をして大変さが大いに身に浸りました。現在、デザインやレイアウトが、あらかた決まり鋭意校正中です。3月発行のエゾマツに同封するべく奮闘中。乞うご期待。

事務局便り

1. ボラレン役員自薦、他薦のお願い

今年は、ボランティア・レンジャー協議会役員の改選の年です。つきましては、下記要領で皆様のご協力を得て、新しい体制づくりをしたいと思っております。よろしくお願ひします。

記

- | | |
|--------------|---|
| (1) 役員自薦について | ご協力いただける方はご連絡をお願いします。 |
| (2) 役員他薦について | 役員としてご推薦いただける方をおしらせください。 |
| (3) 連絡期日 | 2月末日までをお願いします。 |
| (4) 連絡先 | 会長 春日 順雄宛
電話・ファックス 011-881-4090
Eメール vorio12@kca.biglobe.ne.jp |

2. ボランティア保険加入について

当会の事業計画に掲載されるすべての活動が対象になります。他団体の活動については補償されませんので、ご注意ください。保険料は会費より支出いたします。保険に加入していない場合は自己責任となります。補償内容の概略は以下のとおりです。

- (1) 札幌市の社会福祉協議会、ボランティア保険A型(1人300円)、4月から翌年3月まで
- (2) 死亡・後遺障害保険金9,900千円
- (3) 入院保険金(1日あたり6,000円)、通院保険金(3,500円)

加入希望者は2月末日までに、同封のハガキを事務局に送付してください。

3. 備品の整理について

当会が所有する備品の中には、ここ数年使用実績のないものも多く、また保管場所の確保が難しいことから、以下の備品を希望者に譲渡することにいたしました。希望者は下記の連絡先に、2月末日までお願いいたします。希望者多数の場合は抽選、希望者がいない場合には廃棄いたします。また、引渡し場所は札幌エルプラザとします。日時のご相談に応じます。括弧内は台数です。

- (1) フィールドスコープ&三脚 (2)
- (2) 聴診器 (5)
- (3) 双眼鏡 (14)・・・PENTAX 8×24 UCF

* 連絡先 事務局 三輪礼二郎

電話 011-898-0713 Eメール reijiro.m.481526@ab.auone-net.jp

4. 「話題提供」の担当者について

話題提供は、共催観察会前日(下見の日)の9:45~10:15の30分間を予定して会員同士の研鑽のために行なわれます。

- | | | |
|----------|-------|---------------|
| 2月13日(土) | 早坂慶子氏 | 「北海道の湿原」 |
| 3月26日(土) | 佐藤清一氏 | 「雪の結晶にみる生活文化」 |

5. 住所変更について

会報誌「エゾマツ」が返送されることが多くなりました。住所が変わった場合は速やかに上記事務局までお知らせ下さい。

～お知らせ～

定年退職後に、ボランティアの自然ガイドを始めて16年目になる苫小牧・谷口勇五郎さんが自然観察や自然ガイドをする中で経験や勉強をしたことをボラレンの会報紙「エゾマツ」や北海道自然観察協議会の機関誌「自然観察」また「白老の自然」に投稿しています。それらを集約しそれに多少の表現や内容を新しく加えて小冊子『自然観察』を自然ガイド向けに発行（2016年1月）します。

今までに『虫と自然ガイド』『自然ガイド』『自然の観察』などの小冊子を発行しています。詳細は次号「エゾマツ」116号に掲載します。

（広報部）

～編集後記～

※ ボラレン30周年を記念して北海道環境生活部長・宮川秀明様、北海道立野幌森林公園 ふれあい交流館館長・氏家等様、ボラレン創立時よりご協力とご理解いただいている村野紀雄様にメッセージを頂きました。ご多忙にもかかわらず有難うございました。

※ 会員の方々にもご協力の原稿を頂きまして感謝いたします。また会員としてボラレンを支えて下さっている皆様と30周年に向き合いたいと思います。

※ 「エゾマツ」の題字は佐藤清一さんの知人である書家・重住弘一さんが書いて下さっています。

※ 諸先輩のお陰でボラレンも「木」に例えれば大きく太くなって来ましたが、どのくらいに成長したのでしょうか？根はどのくらい張れているのでしょうか？これからもよろしくお願ひします！！！！

※ 皆様の原稿で作られている「エゾマツ」です。次号116号は3月末発行の予定です。原稿はA4サイズ、内容や文字は自由です。メールまたは郵便で下記までお願いいたします。締め切りは3月10日です。

Eメール ukhisui@kke.biglobe.ne.jp

〒 069-0841

江別市大麻元町164-39

内山恭子

【エゾマツ】 30周年記念号

冬季号 115

2016年1月29日発行

会長 春日順雄